

## 列王紀下

## 第一章

「アハブが死んだ後、モアブはイスラエルにそむいた。」

二 さてアハブはサマリヤにある高殿のらんかんから落ちて病氣になったので、使者をつかわし、「行ってエクロンの神バアル・ゼブに、この病氣がなおるかどうかを尋ねよ」と命じた。三 時に、主の使はテシベびとエリヤに言った、「立って、上って行き、サマリヤの王の使者に会って言いなさい、『あなたがたがエクロンの神バアル・ゼブに尋ねようとして行くのは、イスラエルに神がないためか』。四 それゆえ主はこう仰せられる、『あなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであらう』。そこでエリヤは上って行った。

五 使者たちがアハブのもとに帰ってきたので、アハブは彼らに言った、「なぜ帰ってきたのか」。六 彼らは言った、「ひとりの人が上ってきて、われわれに会って言いました、『おまえたちをつかわした王の所へ帰って言いなさい。主はこう仰せられる、あなたがエクロンの神バアル・ゼブに尋ねようとして人をつかわすのは、イスラエルに神がないためなのか。それゆえあなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであらう』。七 アハ

ブは彼らに言った、「上ってきて、あなたがたに会って、これらの事を告げた人はどんな人であったか」。八 彼らは答えた、「その人は毛ごろもを着て、腰に皮の帯を締めていました」。彼は言った、「その人はテシベびとエリヤだ」。

九 そこで王は五十人の長を、部下の五十人と共にエリヤの所へつかわした。彼がエリヤの所へ上っていくと、エリヤは山の頂にすわっていたので、エリヤに言った、「神の人よ、王があなたに、下って来るようにと言われます」。一〇 しかしエリヤは五十人の長に答えた、「わたしはもし神の人であるならば、火が天から下って、あなたと部下の五十人とを焼き尽すでしょう」。そのように火が天から下って、彼と部下の五十人とを焼き尽した。

二 王はまた他の五十人の長を、部下の五十人と共にエリヤにつかわした。彼は上って行ってエリヤに言った、「神の人よ、王がこう命じられます、『すみやかに下ってきなさい』」。三 しかしエリヤは彼らに答えた、「わたしがもし神の人であるならば、火が天から下って、あなたと部下の五十人とを焼き尽すでしょう」。そのように神の火が天から下って、彼と部下の五十人とを焼き尽した。

四 王はまた第三の五十人の長を部下の五十人と共につかわした。第三の五十人の長は上って行って、エリヤの前にひざまずき、彼に願って言った、「神の人よ、どうぞ、わたしの命と、あなたのしもべであるこの五十人の

命をあなたの目に尊いものとみなしてください。二四 ならんさい、火が天からくだって、さきの五十人の長ふたりと、その部下の五十人ずつとを焼き尽しました。しかし今わたしの命をあなたの目に尊いものとみなしてください。二五 その時、主の使はエリヤに言った、「彼と共に下りなさい。彼を恐れてはならない。そこでエリヤは立って、彼と共に下り、王のもとへ行つて、二六 王に言った、「主はこう仰せられます、『あなたはエクロンの神バアル・ゼブに尋ねようと使者をつかわしたが、それはイスラエルに、その言葉を求むべき神がないためであるか。それゆえあなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう』」。

二七 彼はエリヤが言った主の言葉のとおりに死んだが、彼に子がいなかったので、その兄弟ヨラムが彼に代つて王となつた。これはユダの王ヨシヤバテの子ヨラムの二年である。二八 アハジヤのその他の事績は、イスラエルの王の歴代志の書に記してあるではないか。

第二章 「主がむじ風をもつてエリヤを天に上らせようとされた時、エリヤはエリヤと共にギルガルを出て行つた。ニエリヤはエリヤに言った、「どうぞ、ここにとどまってください。主はわたしをベテルにつかわされるのですから」。しかしエリヤは言った、「主は生きておられます。またあなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」。そして彼らはベテルへ

下つた。三三 ベテルにいる預言者のともがらが、エリヤのもとに出てきて彼に言った、「主がきょう、あなたの師事する主人をあなたから取られるのを知っていますか」。彼は言った、「はい、知っています。あなたがたは黙っていてください」。

四 エリヤは彼に言った、「エリヤよ、どうぞ、ここにとどまってください。主はわたしをエリコにつかわされるのですから」。しかしエリヤは言った、「主は生きておられます。またあなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」。そして彼らはエリコへ行つた。五 エリコにいた預言者のともがらが、エリヤのもとにきて彼に言った、「主がきょう、あなたの師事する主人をあなたから取られるのを知っていますか」。彼は言った、「はい、知っています。あなたがたは黙っていてください」。

六 エリヤはまた彼に言った、「どうぞ、ここにとどまってください。主はわたしをヨルダンにつかわされるのですから」。しかし彼は言った、「主は生きておられます。またあなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」。そしてふたりは進んで行つた。七 預言者のともがら五十人も行つて、彼らにむかつて、はるかに離れて立っていた。彼らふたりは、ヨルダンのほとりに立つたが、エリヤは外套を取り、それを巻いて水を打つと、水が左右に分れたので、ふたりはかわいた土の上を渡る

ことができた。

九 彼らが渡ったとき、エリヤはエリシャに言った、「わたしが取られて、あなたを離れる前に、あなたのしてほしい事を求めなさい」。エリシャは言った、「どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください」。一〇 エリヤは言った、「あなたはむずかしい事を求める。あなたがもし、わたしが取られて、あなたを離れるのを見るならば、そのようになるであろう。しかし見ないならば、そのようにはならない」。二 彼らが進みながら語っていた時、火の車と火の馬があらわれて、ふたりを隔てた。そしてエリヤはつむじ風に乗って天にのぼった。三 エリシャはこれを見て「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と叫んだが、再び彼を見なかった。そこでエリシャは自分の着物をつかんで、それを二つに裂き、四 またエリヤの身から落ちた外套を取り上げ、帰ってきてヨルダンの岸に立った。五 そしてエリヤの身から落ちたその外套を取って水を打ち、「エリヤの神、主はどこにおられますか」と言い、彼が水を打つと、水は左右に分れたので、エリシャは渡った。

一五 エリコにいる預言者のともがらは彼の近づいて来るのを見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」と言った。そして彼らは来て彼を迎え、その前に地に伏して、一六 彼に言った、「しもべらの所に力の強い者が五十人います。どうぞ彼らをつかわして、あなたの主人

を尋ねさせてください。主の霊が彼を引きあげて、彼を山か谷に投げたのかも知れません」。エリシャは「つかわしてはならない」と言ったが、一七 彼の恥じるまで、したので、彼は「つかわしなさい」と言った。それで彼らは五十人の者をつかわし、三日の間尋ねたが、彼を見いださなかった。一八 エリシャのなおエリコにとどまっていた時、彼らが帰ってきたので、エリシャは彼らに言った、「わたしは、あなたがたに、行つてはならないと告げたではないか」。

一九 町の人々はエリシャに言った、「見られるとおり、この町の場合は良いが水が悪いので、この地は流産を起すのです」。二〇 エリシャは言った、「新しい皿に塩を盛って、わたしに持ってきたさい」。彼らは持ってきた。三 エリシャは水の源へ出て行って、塩をそこに投げ入れて言った、「主はこう仰せられる、『わたしはこの水を良い水にした。もはやここには死も流産も起らないであろう』」。三三 こうしてその水はエリシャの言ったとおりに良い水になって今日に至っている。

三三 彼はそこからベテルへ上ったが、上って行く途中、小さい子供らが町から出てきて彼をあざけり、彼にむかって「はげ頭よ、のぼれ。はげ頭よ、のぼれ」と言ったので、三四 彼はふり返って彼らを見、主の名をもって彼らをのろった。すると林の中から二頭の雌ぐまが出てきて、その子供らのうち四十二人を裂いた。三五 彼はそこか



からカルメル山へ行き、そこからサマリヤに帰った。

**第三章** ユダの王ヨシヤパテの第十八年にア

ハブの子ヨラムはサマリヤでイスラエルの王となり、十二年世を治めた。彼は主の目の前に悪をおこなったが、その父母のようではなかった。彼がその父の造ったバアルの石柱を除いたからである。しかし彼はイスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪につき従って、それを離れなかった。

四 モアブの王メシヤは羊の飼育者で、十万の小羊と、十万の雄羊の毛とを年々イスラエルの王に納めていたが、五 アハブが死んだ後、モアブの王はイスラエルの王にそむいた。六 そこでヨラム王はその時サマリヤを出て、イスラエルびとをことごとく集め、七 また、人をユダの王ヨシヤパテにつかわし、「モアブの王はわたしにそむきました。あなたはモアブと戦うために、わたしと一緒に行かれませんか」と言わせた。彼は言った、「行きましよう。わたしはあなたと一つです。わたしの民はあなたの民と一つです。わたしの馬はあなたの馬と一つです。八 彼はまた言った、「われわれはどの道を上るのですか」。ヨラムは答えた、「エドムの荒野の道を上りましよう」。

九 こうしてイスラエルの王はユダの王およびエドムの王と共に出て行った。しかし彼らは回り道をして、七日の間進んだが、軍勢とそれに従う家畜の飲む水がなかった。一〇 イスラエルの王は言った、「ああ、主は、この

三人の王をモアブの手に渡そうとして召し集められたのだ」。二 ヨシヤパテは言った、「われわれが主に問うことのできる主の預言者はここにいませんか」。イスラエルの王のひとりの家来が答えた、「エリヤの手に水を注いだシヤパテの子エリシヤがここにいます」。三 ヨシヤパテは言った、「主の言葉が彼にあります」。そこでイスラエルの王とヨシヤパテとエドムの王とは彼のもとへ下っていった。

三 エリシヤはイスラエルの王に言った、「わたしはあなたとなんのかかわりがありますか。あなたの父上の預言者たちと母上の預言者たちの所へ行きなさい」。イスラエルの王は彼に言った、「いいえ、主がこの三人の王をモアブの手に渡そうとして召し集められたのです」。四 エリシヤは言った、「わたしの仕える万軍の主は生きておられます。わたしはユダの王ヨシヤパテのためにするのでなければ、あなたを顧み、あなたに会うことはしないのだが、五 いま樂人をわたしの所に連れてきなさい」。そこで樂人が樂を奏すると、主の手が彼に臨んで、六 彼は言った、「主はこう仰せられる、『わたしはこの谷を水たまりで満たそう』。七 これは主がこう仰せられるからである、『あなたがたは風も雨も見ないのに、この谷に水が満ちて、あなたがたと、その家畜および獸が飲むであらう』。八 これは主の目には小さい事である。主はモアブびとをも、あなたがたの手に渡される。九 そしてあなた

がたはすべての堅固な町と、すべての良い町を撃ち、すべての良い木を切り倒し、すべての水の井戸をふさぎ、石をもって地のすべての良い所を荒すであらう」。二〇あくる朝になって、供え物をささげる時に、水がエドムの方から流れてきて、水は国に満ちた。

三さてモアブびとは皆、王たちが自分たちを攻めるために上ってきたのを聞いたので、よろいを着ることのできる者を、老いも若きもことごとく召集して、国境に配置したが、三朝はやく起きて、太陽がのぼって水を照したとき、モアブびとは目の前に血のように赤い水を見たので、三彼らは言った、「これは血だ。きつと王たちが互に戦って殺し合ったのだ。だから、モアブよ、ぶんどりに行きなさい」。二しかしモアブびとがイスラエルの陣営に行くと、イスラエルびとは立ちあがってモアブびとを撃つたので、彼らはイスラエルの前から逃げ去った。イスラエルびとは進んで、モアブびとを撃ち、その国にはいつて、二五町々を滅ぼし、おのおの石を一つずつ、地のすべての良い所に投げて、これに満ちし、水の井戸をことごとくふさぎ、良い木をことごとく切り倒して、ただキル・ハラセテはその名を残すのみとなったが、石を投げる者がこれを囲んで撃ち滅ぼした。二六モアブの王は戦いがあまりに激しく、当りがたいのを見て、つるぎを抜く者七百人を率い、エドムの王の所に突き入ろうとしたが、果さなかったので、二七自分の位を継ぐべきその長

子をとって城壁の上で燔祭としてささげた。その時イスラエルに大いなる憤りが臨んだので、彼らは彼をすてて自分の国に帰った。

第四章 「預言者のともがらの、ひとりの妻が

エリシヤに呼ばわって言った、「あなたのしもべであるわたしの夫が死にました。ごぞんじのように、あなたのしもべは主を恐れる者でありましたが、今、債主がきて、わたしのふたりの子供を取って奴隷にしようとしているのです」。二エリシヤは彼女に言った、「あなたのために何をしましょうか。あなたの家にどんな物があるか、言いなさい」。彼女は言った、「一びんの油のほかは、はしあめの家に何もありません」。三彼は言った、「ほかへ行つて、隣の人々から器を借りなさい。あいた器を借りなさい。少しばかりではいけません。四そして内にはいつて、あなたの子供たちと一緒に戸の内に閉じこもり、そのすべての器に油をついで、いっばいになったとき、一つずつそれを取りのけておきなさい」。五彼女は彼を離れて去り、子供たちと一緒に戸の内に閉じこもり、子供たちの持つて来る器に油をついだ。六油が満ちたとき、彼女は子供に「もっと器を持ってきなさい」と言ったが、子供が「器はもうありません」と言ったので、油はとまった。七そこで彼女は神の人のところに来て告げたので、彼は言った、「行つて、その油を売って負債を払いなさい。あなたと、あなたの子供たちはその残りで暮すことができ

ます」。

「ある日エリシャはシユネムへ行つたが、そこにひとりの裕福な婦人がいて、しきりに彼に食事をすすめたので、彼はそこを通るごとに、そこに寄つて食事をした。九その女は夫に言った、「いつもわたしたちの所を通るあの人は確かに神の聖なる人です。二〇わたしたちは屋上に壁のある一つの小さいへやを造り、そこに寝台と机といすと燭台とを彼のために備えましょう。そうすれば彼がわたしたちの所に來るとき、そこに、はいることができます」。

二一さて、ある日エリシャはそこにきて、そのへやにはいり、そこに休んだが、二三彼はそのしもべゲハジに「このシユネムの女を呼んできなさい」と言った。彼がその女を呼ぶと、彼女はきてエリシャの前に立つたので、三エリシャはゲハジに言った、「彼女に言いなさい、『あなたはこんなにねんごろに、わたしたちのために心をを用いられたが、あなたのためには何をしたらよいでしょうか。王または軍勢の長にあなたの事をよろしく頼むことをお望みですか』。彼女は答えて言った、「わたしは自分の民のうちに住んでいます」。二四エリシャは言った、「それでは彼女のために何をしようか」。ゲハジは言った、「彼女には子供がなく、その夫は老いています」。二五するとエリシャが「彼女を呼びなさい」と言ったので、彼女を呼ぶと、來て戸口に立つた。二六エリシャは言った、「來年の

今ごろ、あなたはひとりの子を抱くでしょう」。彼女は言った、「いいえ、わが主よ、神の人よ、はしためを欺かないでください」。二七しかし女はついに身ごもつて、エリシャが彼女に言ったように、次の年のその所に子を産んだ。

二八その子が成長して、ある日、刈入れびとの所へ出ていつて、父のもとへ行つたが、二九父にむかつて「頭が、頭が」と言ったので、父はしもべに「彼を母のもとへ背負つていきなさい」と言った。三〇彼を背負つて母のもとへ行くと、昼まで母のひざの上にすわっていたが、ついに死んだ。三母は上がつていつて、これを神の人の寝台の上に置き、戸を閉じて出てきた。三三そして夫を呼んで言った、「どうぞ、しもべひとりと、ろば一頭をわたしにかしてください。急いで神の人の所へ行つて、また帰つてきます」。三三夫は言った、「どうしてきょう彼の所へ行こうとするのか。きょうは、ついたちでもなく、安息日でもない」。彼女は言った、「よろしいのです」。三四そして彼女はろばにくらを置いて、しもべに言った、「速く駆けさせなさい。わたしが命じる時でなければ、歩調をゆるめてはなりません」。三五こうして彼女は出発してカルメル山へ行き、神の人の所へ行つた。三六神の人は彼女の近づいてくるのを見て、しもべゲハジに言った、「向こうから、あのシユネムの女が来る。三七すぐ走つて行つて、彼女を迎えて言いなさい、『あなたは無



事ですか。あなたの夫は無事ですか。あなたの子供は無事ですか。彼女は答えた、「無事です」。二七ところが彼女が山にきて、神の人の所へくるとエリシャの足にすりついた。ゲハジが彼女を追ひのけようと近づいた時、神の人は言った、「かまわずにおきなさい。彼女は心に苦しみがあるのだから。主はそれを隠して、まだわたしにお告げにならないのだ」。二八そこで彼女は言った、「わたしがあなたに子を求めましたか。わたしを欺かないでくださいと言ったではありませんか」。二九エリシャはゲハジに言った、「腰をひきからげ、わたしのつえを手を持って行きなさい。だれに会っても、あいさつしてはならない。またあなたにあいさつする者があっても、それに答えてはならない。わたしのつえを子供顔の上に置きなさい」。三〇子供の母は言った、「主は生きておられます。あなたも生きておられます。わたしはあなたを離れませんが」。そこでエリシャはついに立ちあがって彼女のあとについて行った。三一ゲハジは彼らの先に行つて、つえを子供の顔の上に置いたが、なんの声もなく、生きかえつたしるしもなかったので、帰つてきてエリシャに会い、彼に告げて「子供はまだ目をさましません」と言った。

三二エリシャが家にはいつて見ると、子供は死んで、寝台の上に横たわっていたので、三三彼はいつて戸を閉じ、彼らふたりだけ内にいて主に祈つた。三四そしてエリシャが上がつて子供の上に伏し、自分の口を子供の口の上に、

自分の目の子供の目の上に、自分の両手の子供の両手の上にあて、その身の子供の上に伸ばしたとき、子供のからは暖かになった。三五こうしてエリシャは再び起きあがつて、家の中をあちらこちらと歩み、また上がつて、その身の子供の上に伸ばすと、子供は七たびくしゃみをして目を開いた。三六エリシャはただちにゲハジを呼んで、「あのシュネムの女を呼べ」と言ったので、彼女を呼んだ。彼女がはいつてくるとエリシャは言った、「あなたの子供をつれて行きなさい」。三七彼女ははいつてきて、エリシャの足もとに伏し、地に身をかがめた。そしてその子供を取りあげて出ていった。

三八エリシャはギルガルに帰つたが、その地にききんがあつた。預言者のともがらが彼の前に座していたので、エリシャはそのしもべに言った、「大きなかまをすえて、預言者のともがらのために野菜の煮物をつくりなさい」。三九彼らのうちのひとりが畑に出ていつて青物をつんだが、つる草のあるのを見て、その野うりを一包つんできて、煮物のかまの中に切り込んだ。彼らはそれが何であるかを知らなかったからである。四〇やがてこれを盛って人々に食べさせようとしたが、彼らがその煮物を食べようとした時、叫んで、「ああ神の人よ、かまの中に、たべると死ぬものがはいつています」と言つて、食べる事ができなかった。四一エリシャは「それでは粉を持ってきたなさい」と言つて、それをかまに投げ入れ、「盛つて

人々に食べさせなさい」と言った。かまの中には、なんの毒物もなくなつた。

四二 その時、バアル・シャリシャから人がきて、初穂のパンと、大麦のパン二十個と、新穀一袋とを神の人のもとに持つてきたので、エリシャは「人々に与えて食べさせなさい」と言つたが、四三 その召使は言つた、「どうしてこれを百人の前に供えるのですか」。しかし彼は言つた、「人々に与えて食べさせなさい。主はこう言われる、『彼らは食べてなお余すであろう』。四四 そこで彼はそれを彼らの前に供えたので、彼らは食べてなお余した。主の言葉のとおりであつた。

第五章 スリヤ王の軍勢の長ナアマンはその主君に重んじられた有力な人であつた。主がかつて彼を用いてスリヤに勝利を得させられたからである。彼は大勇士であつたが、らい病をわずらつていた。二さきにスリヤびとが略奪隊を組んで出てきたとき、イスラエルの地からひとりの少女を捕えて行つた。彼女はナアマンの妻に仕えたが、三その女主人にむかつて、「ああ、御主人がサマリヤにいる預言者と共におられたらよかつたでしょうに。彼はそのらい病をいやしたことでしよう」と言つたので、四ナアマンは行つて、その主君に、「イスラエルの地からきた娘がこういう事を言いました」と告げると、五スリヤ王は言つた、「それでは行きなさい。わたしはイスラエルの王に手紙を書きましよう」。

そこで彼は銀十タラントと、金六千シケルと、晴れ着十着を携えて行つた。六彼がイスラエルの王に持つて行つた手紙には、「この手紙があなたにとどいたならば、わたしの家来ナアマンを、あなたにつかわしたとことと御承知ください。あなたに彼のらい病をいやしていただくためです」とあつた。七イスラエルの王はその手紙を読んだ時、衣を裂いて言つた、「わたしは殺したり、生かしたりすることのできる神であろうか。どうしてこの人は、らい病人をわたしにつかわして、それをいやせと言うのか。あなたがたは、彼がわたしに争いをしかけているのを知つて警戒するがよい」。

八神の人エリシャは、イスラエルの王がその衣を裂いたことを聞き、王に人をつかわして言つた、「どうしてあなたは衣を裂いたのですか。彼をわたしのもとにこさせなさい。そうすれば彼はイスラエルに預言者のあることを知るようになるでしょう」。九そこでナアマンは馬と車とを従えてきて、エリシャの家の入口に立つた。一〇するとエリシャは彼に使者をつかわして言つた、「あなたはヨルダンへ行つて七たび身を洗いなさい。そうすれば、あなたの肉はもとにかえて清くなるでしょう」。二しかしナアマンは怒つて去り、そして言つた、「わたしは、彼がきつとわたしのもとに出てきて立ち、その神、主の名を呼んで、その箇所の上に手を動かして、らい病をいやすのだらうと思つた。三ダマスコの川アバナとバルバル



はイスラエルのすべての川水にまさるではないか。わたしはこれらの川に身を洗って清まることができないのであるうか。こうして彼は身をめぐらし、怒って去った。

三その時、しもべたちは彼に近よって言った、「わが父よ、預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じても、あなたはそれをなさらなかったでしょう。まして彼はあなたに『身を洗って清くなれ』と言うだけではありませんか。二四そこでナアマンは下って行って、神の人の言葉のように七たびヨルダンに身を浸すと、その肉がもとにかえって幼な子の肉のようになり、清くなった。

二五彼はすべての従者を連れて神の人のもとに帰ってきて、その前に立って言った、「わたしは今、イスラエルのほか、全地のどこにも神のおられないことを知りました。それゆえ、どうぞ、しもべの贈り物を受けてください。二六エリシャは言った、「わたしの仕える主は生きておられる。わたしは何も受けません。彼はしいて受けさせようとしたが、それを拒んだ。二七そこでナアマンは言った、「もしお受けにならないのであれば、どうぞ驃馬に二駄の土をしもべにください。これから後しもべは、他の神には燔祭も犠牲もささげず、ただ主にのみささげます。二八どうぞ主がこの事を、しもべにおゆるしくださるよう。すなわち、わたしの主君がリンモンの宮にはいつて、そこで礼拝するとき、わたしの手によりかかることがあり、またわたしもリンモンの宮で身をかがめることがあ

りましょう。わたしがリンモンの宮で身をかがめる時、どうぞ主がその事を、しもべにおゆるしくださるよう。二九エリシャは彼に言った、「安んじて行きなさい」。

ナアマンがエリシャを離れて少し行ったとき、三〇神の人エリシャのしもべゲハジは言った、「主人はこのスリヤびとナアマンをいたわって、彼が携えてきた物を受けなかった。主は生きておられる。わたしは彼のあとを追いかけて、彼から少し、物を受けよう。三一そしてゲハジはナアマンのあとを追ったが、ナアマンは自分のあとから彼が走ってくるのを見て、車から降り、彼を迎えて、「変った事があるのですか」と言う。三二彼は言った、「無事です。主人がわたしをつかわして言わせます、三三だいまエフライムの山地から、預言者のともがらのふたりの若者が、わたしのもとに来ましたので、どうぞ彼らに銀一タラントと晴れ着二着を与えてください。三三ナアマンは、「どうぞ二タラントを受けてください」と言つて彼にしい、銀二タラントを二つの袋に入れ、晴れ着二着を添えて、自分のふたりのしもべに渡したので、彼らはそれを負ってゲハジの先に立って進んだが、三四彼は丘にきたとき、それを彼らの手から受け取って家のうちにおさめ、人々を送りかえたので、彼らは去った。三五彼がはいって主人の前に立つと、エリシャは彼に言った、「ゲハジよ、どこへ行ってきたのか。彼は言った、「しもべはどこへも行きません。三六エリシャは言った、「あの

人が車をはなれて、あなたを迎えたとき、わたしの心はあなたと一緒にそこにいたではないか。今は金を受け、着物を受け、オリブ畑、ぶどう畑、羊、牛、しもべ、はしためを受ける時であろうか。エミそれゆえ、ナアマンのらい病はあなたに着き、ながくあなたの子孫に及ぶであろう。彼がエリシャの前を出ていくとき、らい病が發して雪のように白くなっていた。

第六章 「さて預言者のともがらはエリシャ

に言った、「わたしたちがあなたと共に住んでいる所は狭くなりましたので、わたしたちをヨルダンに行かせ、そこからめいめい一本ずつ材木を取ってきて、わたしたちの住む場所を造らせてください」。エリシャは言った、「行きなさい」。三時にそのひとりが、「どうぞあなたもしもべらと一緒に行ってください」と言ったので、エリシャは「行きましょう」と答えた。四そしてエリシャは彼らと一緒に行った。彼らはヨルダンへ行って木を切り倒したが、五ひとりが材木を切り倒しているとき、おの頭が水の中に落ちたので、彼は叫んで言った、「ああ、わが主よ、これは借りたものです」。六神の人は言った、「それはどこに落ちたのか」。彼がその場所を知らせると、エリシャは一本の枝を切り落し、そこに投げ入れて、そのおの頭を浮かべ、七それを取りあげよ」と言ったので、その人は手を伸べてそれを取った。

八かつてスリヤの王がイスラエルと戦っていたとき、家

来たちと評議して「しかじかの所にわたしの陣を張ろう」と言うとき、九神の人はイスラエルの王に「あなたは用心して、この所をとおつてはなりません。スリヤびとがそこに下ってきますから」と言い送った。一〇それでイスラエルの王は神の人が自分に告げてくれた所に人をつかわし、警戒したので、その所でみずからを防ぎえたことは一、二回にとどまらなかった。

二スリヤの王はこの事のために心を悩まし、家来たちを召して言った、「われわれのうち、だれがイスラエルの王と通じているのか、わたしに告げる者はないか」。三ひとりの家来が言った、「王、わが主よ、だれも通じている者はいません。ただイスラエルの預言者エリシャが、あなたが寢室で語られる言葉でもイスラエルの王に告げるのです」。四王は言った、「彼がどこにいるか行って捜しなさい。わたしは人をやって彼を捕えよう」。時に「彼はドタンにいる」と王に告げる者があつたので、五王はそこに馬と戦車および大軍をつかわした。彼らは夜のうちに来て、その町を囲んだ。

六神の人の召使が朝早く起きて出て見ると、軍勢が馬と戦車をもって町を囲んでいたもので、その若者はエリシャに言った、「ああ、わが主よ、わたしたちはどうしましようか」。七エリシャは言った、「恐れることはない。われわれと共にいる者は彼らと共にいる者よりも多いのだから」。八そしてエリシャが祈って「主よ、どうぞ、彼

の目を開いて見させてください」と言う、主はその若者の目を開かれたので、彼が見ると、火の馬と火の戦車が山に満ちてエリシャのまわりにあった。「イスリヤびとがエリシャの所に下ってきた時、エリシャは主に祈って言った、「どうぞ、この人々の目をくらましてください」。するとエリシャの言葉のとおり、彼らの目をくらまされた。」「そこでエリシャは彼らに「これはその道ではない。これはその町でもない。わたしについてきなさい。わたしはあなたがたを、あなたがたの尋ねる人の所へ連れて行きますしう」と言って、彼らをサマリヤへ連れて行った。

二〇 彼らがサマリヤにはいったとき、エリシャは言った、「主よ、この人々の目を開いて見させてください」。主は彼らの目を開かれたので、彼らが見ると、見よ、彼らはサマリヤのうちに来ていた。三イスラエルの王は彼らを見て、エリシャに言った、「わが父よ、彼らを撃ち殺しましょうか。彼らを撃ち殺しましょうか」。三エリシャは答えた、「撃ち殺してはならない。あなたはつるぎと弓をもつて、捕虜にした者どもを撃ち殺すでしょうか。パンと水を彼らの前に供えて食い飲みさせ、その主君のもとへ行かせなさい」。三そこで王は彼らのために盛んなふるまいを設けた。彼らが食い飲みを終ると彼らを去らせたので、その主君の所へ帰った。スリヤの略奪隊は再びイスラエルの地にこなかった。

二四 この後スリヤの王ベネハダデはその全軍を集め、上つてきてサマリヤを攻め囲んだので、二五 サマリヤに激しいききんが起った。すなわち彼らがこれを攻め囲んだので、ついに、ろばの頭一つが銀八十シケルで売られ、はとのふん一カブの四分の一が銀五シケルで売られるようになった。二六 イスラエルの王が城壁の上をとおっていた時、ひとりの女が彼に呼ばわって、「わが主、王よ、助けてください」と言ったので、二七 彼は言った、「もし主があなたを助けられないならば、何をもつてわたしがあなたを助けることができよう。打ち場の物をもつてか、酒ぶねの物をもつてか」。二八 として王は女に尋ねた、「何事なのですか」。彼女は答えた、「この女はわたしにむかつて『あなたの子をください。わたしたちは、きょうそれを食べ、あす、わたしの子を食べましょう』と言いました。二九 それでわたしたちは、まずわたしの子を煮て食べましたが、次の日わたしは彼女にむかつて『あなたの子をください。わたしたちはそれを食べましょう』と言いますと、彼女はその子を隠しました」。三〇 王はその女の言葉を聞いて、衣を裂き、——王は城壁の上をとおっていたが、民が見ると、その身に荒布を着けていた——三二 そして王は言った、「きょう、シャパテの子エリシャの首がその肩の上にすわっているならば、神がどんなにでもわたしを罰してくださいように」。三三 さてエリシャはその家に座していたが、長老たちも



きて彼と共に座した。王は自分の所から人をつかわしたが、エリシヤはその使者がまだ着かないうちに長老たちに言った、「あなたがたは、この人を殺す者がわたしの首を取るために、人をつかわすのを見ますか。その使者がきたならば、戸を閉じて、内に入れてはなりません。彼のうしろに、その主君の足音がするではありませんか」。彼がなにお彼らと語っているうちに、王は彼のもとに下ってきて言った、「この災は主から出たのです。わたしはどうしてこの上、主を待たなければならぬでしようか」。

第七章 「エリシヤは言った、「主の言葉を聞き

なさい。主はこう仰せられる、『あすの今ごろサマリヤの門で、麦粉一セアを一シケルで売り、大麦二セアを一シケルで売ようになるであらう』。二時にひとりの副官すなわち王がその人の手によりかかつていた者が神の人に答えて言った、「たとい主が天に窓を開かれても、そんな事がありえましょうか」。エリシヤは言った、「あなたは自分の目をもってそれを見るであらう。しかしそれを食べることはなからう」。

三 さて町の門の入口に四人のらい病人がいたが、彼らは互に言った、「われわれはどうしてここに座して死を待たねばならないのか。四 われわれがもし町にはいろうといえ、町には食物が尽きているから、われわれはそこで死ぬであらう。しかしここに座していても死ぬのだ。

いっその事、われわれはスリヤびとの陣営へ逃げて行こう。もし彼らがわれわれを生かしておいてくれるならば、助かるが、たといわれわれを殺しても死ぬばかりだ」。五 そこで彼らはスリヤびとの陣営へ行こうと、たそがれに立ちあがったが、スリヤびとの陣営のほとりに行つて見ると、そこにはだれもいなかった。六 これは主がスリヤびとの軍勢に戦車の音、馬の音、大軍の音を聞かせられたので、彼らは互に「見よ、イスラエルの王がわれわれを攻めるために、ヘテびとの王たちおよびエジプトの王たちを雇ってきて、われわれを襲うのだ」と言つて、七 たそがれに立つて逃げ、その天幕と、馬と、ろばを捨て、陣営をそのままにしておいて、命を全うしようと逃げたからである。八 そこでらい病人たちは陣営のほとりに行き、一つの天幕にはいつて食い飲みし、そこから金銀、衣服を持ち出してそれを隠し、また来て、他の天幕に入り、そこからも持ち出してそれを隠した。

九 そして彼らは互に言った、「われわれのしている事はよくない。きょうは良いおとずれのある日であるのに、黙っていて、夜明けまで待つならば、われわれは罰をこうむるであらう。さあ、われわれは行って王の家族に告げよう」。一〇 そこで彼らは来て、町の門を守る者を呼んで言った、「わたしたちがスリヤびとの陣営に行つて見ると、そこにはだれの姿も見えず、また人声もなく、ただ、馬とろばがつかないであり、天幕はそのままでした」。二そ



たこれがその子で、エリシャが生きかえらせたのです。六王がその女に尋ねると、彼女は王に話したので、王は彼女のためにひとりの役人に命じて言った、「すべて彼女に属する物、ならびに彼女がこの地を去った日から今までのその畑の産物をことごとく彼女に返しなさい」。

七さてエリシャはダマスコに來た。時にスリヤの王ベネハダデは病氣であつたが、「神の人がここに來た」と告げる者があつたので、王はハザエルに言った、「贈り物を携えて行つて神の人を迎え、彼によつて主に『わたしこの病氣はなおりましようか』と言つて尋ねなさい」。

九そこでハザエルは彼を迎えようと、ダマスコのもろもの、ろの良い物をらくだ四十頭に載せ、贈り物として携え行き、エリシャの前に立つて言った、「あなたの子、スリヤの王ベネハダデがわたしをあなたにつかわして、『わたしのこの病氣はなおりましようか』と言わせています」。一〇エリシャは彼に言った、「行つて彼に『あなたは必ずなおります』と告げなさい。ただし主はわたしに、彼が必ず死ぬことを示されました。二そして神の人がひとみを定めて彼の恥じるまでに見つめ、やがて泣き出したので、三ハザエルは言った、『わが主よ、どうして泣かれるのですか』。エリシャは答えた、『わたしはあなたがイスラエルの人々にしようとする害悪を知っているからです。すなわち、あなたは彼らの城に火をかけ、つるぎをもつて若者を殺し、幼な子を投げうち、妊娠の女を引

き裂くでしよう。三ハザエルは言った、『しもべは一匹の犬にすぎないのに、どうしてそんな大きな事をするこゝとができましよう』。エリシャは言った、『主がわたしに示されました。あなたはスリヤの王となるでしよう』。四彼がエリシャのもとを去つて、主君のところへ行くと、『エリシャはあなたになんと言つたか』と尋ねられたので、『あなたは必ずなおるでしよう』と、彼はわたしに告げました』と答えた。五しかし翌日になつてハザエルは布を取つて水に浸し、それをもつて王の顔をおつたので、王は死んだ。ハザエルは彼に代つて王となつた。

一六イスラエルの王アハブの子ヨラムの第五年に、ユダの王ヨシヤバテの子ヨラムが位についた。一七彼は王となつたとき三十二歳で、八年の間エルサレムで世を治めた。一八彼はアハブの家がしたようにイスラエルの王たちの道に歩んだ。アハブの娘が彼の妻であつたからである。彼は主の目の前に悪をおこなつたが、一九主はしもベダビデのためにユダを滅ぼすことを好まなかつた。すなわち主は彼とその子孫に常にともしびを与えると、彼に約束されたからである。

二〇ヨラムの世にエドムがそむいてユダの支配を脱し、みずから王を立てたので、三ヨラムはすべての戦車を従えてザイルにわたつて行き、その戦車の指揮官たちと共に、夜のうちに立ちあがつて、彼を包圍しているエドムびとを撃つた。しかしヨラムの軍隊は天幕に逃げ帰つ



た。二三エドムはこのようにそむいてユダの支配を脱し、今日に至っている。リブナもまた同時にそむいた。二三ヨラムのその他の事績および彼がしたすべての事は、ユダの歴代志の書にしるされてはいないか。二四ヨラムはその先祖たちと共に眠って、ダビデの町にその先祖たちと共に葬られ、その子アハジャが代って王となった。

二五イスラエルの王アハブの子ヨラムの第十二年にユダの王ヨラムの子アハジャが位についた。二六アハジャは王となったとき二十二歳で、エルサレムで一年世を治めた。その母は名をアタリヤといって、イスラエルの王オムリの孫娘であった。二七アハジャはまたアハブの家の道に歩み、アハブの家がしたように主の目の前に悪をおこなった。彼はアハブの家の婿であつたからである。

二八彼はアハブの子ヨラムと共に行って、スリヤの王ハザエルとラモテ・ギレアデで戦つたが、スリヤびとらはヨラムに傷を負わせた。二九ヨラム王はそのスリヤの王ハザエルと戦うときにラマでスリヤびとに負わされた傷をいやすため、エズレルに帰つたが、ユダの王ヨラムの子アハジャはアハブの子ヨラムが病んでいたので、エズレルに下つて彼をおとずれた。

第九章 一時に預言者エリシヤは預言者のともがらのひとりを呼んで言った、「腰をひきからげ、この油のびんを携えて、ラモテ・ギレアデへ行きなさい。二そこに着いたならば、ニムシの子ヨシヤパテの子であるエ

ヒウを尋ね出し、内にはいつて彼をその同僚たちのうちから立たせて、奥の間に連れて行き、三油のびんを取つて、その頭に注ぎ、『主はこう仰せられる、わたしはあなたに油を注いでイスラエルの王とする』と言ひ、そして戸をあけて逃げ去りなさい。とどまつてはならない。

四そこで預言者であるその若者はラモテ・ギレアデへ行つたが、五来て見ると、軍勢の長たちが会議中であつたので、彼は「將軍よ、わたしはあなたに申しあげる事があります」と言ふと、エヒウが答えて、「われわれすべてのうちの、だれにですか」と言つたので、彼は「將軍よ、あなたにです」と言つた。六するとエヒウが立ちあがつて家にはいつたので、若者はその頭に油を注いで彼に言つた、「イスラエルの神、主はこう仰せられます、『わたしはあなたに油を注いで、主の民イスラエルの王とする。七あなたは主君アハブの家を撃ち滅ぼさなければならぬ。それによつてわたしは、わたしのしもべである預言者たちの血と、主のすべてのしもべたちの血をイゼベルに報いる。八アハブの全家は滅びるであらう。アハブに属する男は、イスラエルにいて、つなかれた者も、自由な者も、ことごとくわたしは断ち、九アハブの家をネバテの子ヤラベアムのようにし、アヒヤの子バアシャの家のようにする。一〇犬がエズレルの地域でイゼベルを食ひ、彼女を葬る者はないであらう』。そして彼は戸をあけて逃げ去つた。

「二やがてエヒウが主君の家来たちの所へ出て来ると、彼らはエヒウに言った、『変わった事はありませんか。あの氣違ひは、なんのためにあなたの所にきたのですか』。エヒウは彼らに言った、『あなたがたは、あの人を知っています。またその言う事も知っています』。三彼らは言った、『それは違います。どうぞわれわれに話してください』。そこでエヒウは言った、『彼はこうこう、わたしに告げて言いました、『主はこう仰せられる、わたしはあなたに油を注いで、イスラエルの王とする』。四すると彼らは急いで、おのの衣服をとり、それを階段の上のエヒウの下に敷き、ラッパを吹いて『エヒウは王である』と言った。

「五こうしてニムシの子であるヨシヤバテの子エヒウはヨラムにそむいた。(ヨラムはイスラエルをことごとく率いて、ラモテ・ギレアデでスリヤの王ハザエルを防いだが、六ヨラム王はスリヤの王ハザエルと戦った時に、スリヤびとに負わされた傷をいやすため、エズレルに帰っていた) エヒウは言った、『もしこれがあなたがたの本心であるならば、ひとりもこの町から忍び出て、これをエズレルに告げてはならない』。七そしてエヒウは車に乗ってエズレルへ行った。ヨラムがそこに伏していたからである。またユダの王アハジヤはヨラムを見舞うために下っていた。

八さてエズレルのやぐらに、ひとりの物見が立っている

たが、エヒウの群衆が来るのを見て、『群衆が見える』と言ったので、ヨラムは言った、『ひとりを馬に乗せてつかわし、それに会わせて『平安ですか』と言わせなさい』。九そこでひとりが馬に乗って行き、彼に会って言った、『王はこう仰せられます、『平安ですか』。エヒウは言った、『あなたは平安となんの関係がありますか。わたしのあとについてきなさい』。物見はまた告げました、『使者は彼らの所へ行きました、帰ってきません』。一〇そこで再び人を馬でつかわしたので、彼らの所へ行って言った、『王はこう仰せられます、『平安ですか』。エヒウは答えて言った、『あなたは平安となんの関係がありますか。わたしのあとについてきなさい』。二物見はまた告げて言った、『彼も、彼らの所へ行きましたが帰ってきません。あの車の操縦はニムシの子エヒウの操縦するのに似て、猛烈な勢いで操縦して来ます』。

三そこでヨラムが『車を用意せよ』と言ったので、車を用意すると、イスラエルの王ヨラムと、ユダの王アハジヤは、おのその車で出ていった。すなわちエヒウに会うために出て行って、エズレルびとナボテの地所で彼に会った。四ヨラムはエヒウを見て言った、『エヒウよ、平安ですか』。エヒウは答えた、『あなたの母イゼベルの姦淫と魔術とが、こんなに多いのに、どうして平安でありえましょうか』。五その時ヨラムは車をめぐらして逃げ、アハジヤにむかって、『アハジヤよ、反逆です』

と言うと、二四 エヒウは手に弓をひきしぼって、ヨラムの両肩の間を射たので、矢は彼の心臓を貫き、彼は車の中に倒れた。二五 エヒウはその副官ビデカルに言った、「彼を取りあげて、エズレルびとナボテの畑に投げ捨てなさい。かつて、わたしとあなたと、ふたり共に乗って、彼の父アハブに従ったとき、主が彼について、この預言をされたことを記憶しなさい。二六 すなわち主は言われた、『まことに、わたしはきのうナボテの血と、その子らの血を見た』。また主は言われた、『わたしはこの地所であなただに報復する』と。それゆえ彼を取りあげて、その地所に投げすて、主の言葉のようにしなさい』。

二七 ユダの王アハジヤはこれを見てベテハガンの方へ逃げたが、エヒウはそのあとを追ひ、「彼をも撃て」と言つたので、イブレアムのほとりのグルの坂で車の中の彼を撃つた。彼はメギドまで逃げていって、そこで死んだ。二八 その家来たちは彼を車に載せてエルサレムに運び、ダビデの町で彼の墓にその先祖たちと共に葬った。

二九 アハブの子ヨラムの第十一年にアハジヤはユダの王となつたのである。

三〇 エヒウがエズレルにきた時、イゼベルはそれを聞いて、その目を塗り、髪を飾って窓から望み見たが、三エヒウが門にはいつてきたので、「主君を殺したジムリよ、無事ですか」と言った。三二するとエヒウは顔をあげて窓にむかい、「だれか、わたしに味方する者があるか。だ

れかあるか」と言う、二、三人の宦官がエヒウを望み見たので、三三 エヒウは「彼女を投げ落せ」と言った。彼らは彼女を投げ落したので、その血が壁と馬とにはねかかった。そして馬は彼女を踏みつけた。三四 エヒウは内にはいつて食い飲みし、そして言った、「あののろわれた女を見、彼女を葬りなさい。彼女は王の娘なのだ」。三五 かし彼らが彼女を葬ろうとして行つて見ると、頭蓋骨と足と、たなごころのほか何もなかった、三六 帰つて、彼に告げると、彼は言った、「これは主が、そのしもべ、テシベびとエリヤによつてお告げになつた言葉である。すなわち『エズレルの地で犬がイゼベルの肉を食うであろう。三七 イゼベルの死体はエズレルの地で、糞土のやうに野のおもてに捨てられて、だれも、これはイゼベルだ、と言うことができないであろう』」。

第一章 アハブはサマリヤに七十人の子供があつた。エヒウは手紙をしたためてサマリヤに送り、町のつかさたちと、長老たちと、アハブの子供の守役たちとに伝えて言つた、三「あなたがたの主君の子供たちがあなたがたと共におり、また戦車も馬も、堅固な町も武器もあるのだから、この手紙があなたがたのもとに届いたならば、すぐ、三あなたがたは主君の子供たちのうち最もすぐれた、最も適当な者を選んで、その父の位にすえ、主君の家のために戦いなさい」。四 彼らは大いに恐れて言つた、「ふたりの王たちがすでに彼に当ることができな



かったのに、われわれがどうして当ることができよう」。そこで宮廷のつかさ、町のつかさ、長老たちと守役たちはエヒウに人をつかわして言った、「わたしたちは、あなたのしもべです。すべてあなたが命じられる事をいたします。わたしたちは王を立てることを好みません。あなたがよいと思われることをしてください」。そこでエヒウは再び彼らに手紙を書き送って言った、「もしあなたがたが、わたしに味方し、わたしに従おうとするならば、あなたがたの主君の子供たちの首を取って、あすの今ごろエズレルにいるわたしのもとに持ってきたさい」。そのころ、王の子供たち七十人は彼らを育てていた町のおもだった人々と共にいた。彼らはその手紙を受け取ると、王の子供たちを捕えて、その七十人をことごとく殺し、その首をかごにつめて、エズレルにいるエヒウのもとに送った。使者が来て、エヒウに告げ、「人々が王の子供たちの首を持ってきました」と言うと、「あくる朝までそれを門の入口に、ふた山に積んでおけ」と言った。朝になると、彼は出て行って立ち、すべての民に言った、「あなたがたは正しい。主君にそむいて彼を殺したのにはわたしです。しかしこのすべての者どもを殺したのはだれですか。これでああなたがたは、主がアハブの家にについて告げられた主の言葉は一つも地に落ちないことを知りなさい。主は、そのしもべエリヤによってお告げになった事をなし遂げられたのです」。二こうしてエヒウ

は、アハブの家に属する者でエズレルに残っている者のことごとく殺し、またそのすべてのおもだった者、その親しい者およびその祭司たちを殺して、彼に属する者はひとりも残さなかった。

三さてエヒウは立つてサマリヤへ行つたが、途中、牧者の集まり場で、エダの王アハジヤの身内の人々に会い、「あなたがたはどなたですか」と言う。わたしは「わたしはアハジヤの身内の者ですが、王の子供たちと、王母の子供たちの安否を問うために下ってきたのです」と答えたので、エヒウは「彼らをいけどれ」と命じた。そこで彼らをいけどつて、集まり場の穴のかたわらで彼ら四十二人をことごとく殺し、ひとりをも残さなかった。

四五エヒウはそこを立つて行つたが、自分を迎えにきたレカブの子ヨナダブに会つたので、彼にあいさつして、「あなたの心は、わたしがあなたに対するように真実ですか」と言うと、ヨナダブは「真実です」と答えた。するとエヒウは「それならば、あなたの手をわたしに伸べなさい」と言つたので、その手を伸べると、彼を引いて自分の車に上らせ、「六わたしと一緒にきて、わたしが主に熱心なのを見なさい」と言つた。そして彼を自分の車に乗せ、「七サマリヤへ行つて、アハブに属する者で、サマリヤに残っている者をことごとく殺して、その一族を滅ぼした。主がエリヤにお告げになった言葉のとおりである。

「八次いでエヒウは民をことごとく集めて彼らに言った、「アハブは少しばかりバアルに仕えたが、エヒウは大いにこれに仕えるであろう。」「九それゆえ、今バアルのすべての預言者、すべての礼拝者、すべての祭司をわたしのもとに召しなさい。ひとりもこない者のないようになさい。わたしは大いなる犠牲をバアルにささげようとしている。すべてこない者は生かしておかない」。しかしエヒウはバアルの礼拝者たちを滅ぼすために偽ってこしたのである。」「十そしてエヒウは「バアルのために聖会を催しなさい」と命じたので、彼らはこれを布告した。」「十一エヒウはあまねくイスラエルに人をつかわしたので、バアルの礼拝者たちはことごとく来た。こないで残った者はひとりもなかった。彼らはバアルの宮にはいったので、バアルの宮は端から端までいっぱいになった。」「十二その時エヒウは衣装をつかさどる者に「祭服を取り出してバアルのすべての礼拝者に与えよ」と言ったので、彼らのために祭服を取り出した。」「十三そしてエヒウはレカブの子ヨナダブと共にバアルの宮に入り、バアルの礼拝者たちに言った、「調べてみて、ここにはただバアルの礼拝者のみで、主のしもべはひとりも、あなたがたのうちにいないようにしなさい」。」「十四こうして彼は犠牲と燔祭とをささげるためにはいった。

さてエヒウは八十人の者を外に置いて言った、「わたしはあなたがたの手に渡す者をひとりでも逃がす者は、自

分の命をもってその人の命に換えなければならない」。」「十五こうして燔祭をささげることが終わったとき、エヒウはその侍衛と将校たちに言った、「はいって彼らを殺せ。ひとりも逃がしてはならない」。侍衛と将校たちはつるぎをもって彼らを撃ち殺し、それを投げ出して、バアルの宮の本殿に入り、十六バアルの宮にある柱の像を取り出して、それを焼いた。」「十七また彼らはバアルの石柱をこわし、バアルの宮をこわして、かわやとしたが今日まで残っている。

十八このようにエヒウはイスラエルのうちからバアルを一掃した。」「十九しかしエヒウはイスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪、すなわちベテルとダンにある金の子牛に仕えることをやめなかった。」「二十主はエヒウに言われた、「あなたはわたしの目にかなう事を行うにあたって、よくそれを行い、またわたしの心にあるすべての事をアハブの家にしたので、あなたの子孫は四代までイスラエルの位に座するであろう」。」「二十一しかしエヒウはイスラエルの神、主の律法を心をつくして守り行おうとはせず、イスラエルに罪を犯させたヤラベアムの罪を離れなかった。

二十二この時にあたって、主はイスラエルの領地を切り取ることを始められた。すなわちハザエルはイスラエルのすべての領域を侵し、二十三ヨルダンの東で、ギレアデの全地、ガドびと、ルベンびと、マナセびとの地を侵し、ア

ルノン川のほとりにあるアロエルからギレアデとバシヤンに及んだ。三エヒウのその他の事績と、彼がしたすべての事およびその武勇は、ことごとくイスラエルの王の歴代志の書に記されるではないか。三エヒウはその先祖たちと共に眠ったので、彼をサマリヤに葬った。その子エホアハズが代つて王となった。三エヒウがサマリヤでイスラエルを治めたのは二十八年であつた。

第一章 一さてアハジヤの母アタリヤはその子の死んだのを見て、立つて王の一族をことごとく滅ぼしたが、ニヨラム王の娘で、アハジヤの姉妹であるエホシバはアハジヤの子ヨアシを、殺されようとしてゐる王の子たちのうちから盗み取り、彼とそのうばとを寝室に入れて、アタリヤに隠したので、彼はついに殺されなかつた。三ヨアシはうばと共に六年の間、主の宮に隠れてゐたが、その間アタリヤが国を治めた。

第七年になつてエホヤダは人をつかわして、カリびとと近衛兵との大将たちを招きよせ、主の宮にゐる自分のもとにこさせ、彼らと契約を結び、主の宮で彼らに誓いをさせて王の子を見せ、命じて言つた、「あなたがたのする事はこれです、すなわち、安息日に非番となつて王の家を守るあなたがたの三分の一は、大宮殿を守らなければならぬ。(他の三分の一はスルの門におり、三分の一は近衛兵のうしろの門におる)。すべて安息日に當番で主の宮を守るあなたがたの二つの部隊は、八のお

の武器を手にとって王のまわりに立たなければならぬ。すべて列に近よる者は殺されなければならない。あなたがたは王が出る時にも、はいる時にも王と共にいなければならない。

そこでその大将たちは祭司エホヤダがすべて命じたとおりにおこなつた。すなわち彼らはおの安息日に非番となる者と、安息日に當番となる者とを率いて祭司エホヤダのもとにきたので、祭司は主の宮にあるダビデ王のやりと盾を大将たちに渡した。二近衛兵はおの手に武器をとつて主の宮の南側から北側まで、祭壇と宮を取り巻いて立つた。三そこでエホヤダは王の子をつれ出して冠をいただかせ、律法の書を渡し、彼を王と宣言して油を注いだので、人々は手を打つて「王万歳」と言つた。

三アタリヤは近衛兵と民の声を聞いて、主の宮に入り、民のところへ行つて、「見ると、王は慣例にしたがつて柱のかたわらに立ち、王のかたわらには大将たちとラツパ手たちが立ち、また国の民は皆喜んでラツパを吹いていたので、アタリヤはその衣を裂いて、「反逆です、反逆です」と叫んだ。四その時祭司エホヤダは軍勢を指揮していた大将たちに命じて、「彼女を列の間をとつて出て行かせ、彼女に従う者をつるぎをもつて殺しなさい」と言つた。これは祭司がさきに「彼女を主の宮で殺してはならない」と言つたからである。五そこで彼らは彼女を



捕え、王の家の馬道へ連れて行つたが、彼女はついにそこで殺された。

七 かくてエホヤダは主と王および民との間に、皆主の民となるという契約を立てさせ、また王と民との間にもそれを立てさせた。八 そこで国の民は皆バアルの宮に行つて、これをこわし、その祭壇とその像を打ち碎き、バアルの祭司マツタンをその祭壇の前で殺した。そして祭司は主の宮に管理人を置いた。九 次いでエホヤダは大将たちと、カリびとと、近衛兵と国のすべての民を率いて、主の宮から王を導き下り、近衛兵の門の道から王の家に入り、王の位に座せしめた。一〇 こうして国の民は皆喜び、町はアタリヤが王の家でつるぎをもつて殺されてのち、おだやかになった。

三 ヨアシは位についた時七歳であつた。

第一二章 一 ヨアシはエヒウの第七年に位につき、エルサレムで四十年の間、世を治めた。その母はベエルシバの出身で、名をデビアといつた。二 ヨアシは一生の間、主の目にならう事をおこなつた。祭司エホヤダが彼を教えたからである。三 しかし高き所は除かなかつたので、民はなおその高き所で犠牲をささげ、香をたいた。

四 ヨアシは祭司たちに言つた、「すべて主の宮に聖別してささげる銀、すなわちおのおのが課せられて、割当にしたがつて人々の出す銀、および人々が心から願つて主の宮に持つてくる銀は、五 これを祭司たちがおのおのそ

の知る人から受け取り、どこでも主の宮に破れの見える時は、それをもつてその破れを繕わなければならない。六 ところがヨアシ王の二十三年に至るまで、祭司たちは主の宮の破れを繕わなかつた。七 それで、ヨアシ王は祭司エホヤダおよび他の祭司たちを召して言つた、「なぜ、あなたがたは主の宮の破れを繕わないのか。あなたがたはもはや知人から銀を受けてはならない。主の宮の破れを繕うためにそれを渡しなさい。八 祭司たちは重ねて民から銀を受けない事と、主の宮の破れを繕わない事とに同意した。

九 そこで祭司エホヤダは一つの箱を取り、そのふたに穴をあけて、それを主の宮の入口の右側、祭壇のかたわらに置いた。そして門を守る祭司たちは主の宮にはいつてくる銀をことごとくその中に入れた。一〇 こうしてその箱の中に銀が多くなつたのを見ると、王の書記官と大祭司が上つてきて、主の宮にある銀を数えて袋に詰めた。二 そしてその数えた銀を、工事をつかさどる主の宮の監督者の手にわたしたので、彼らはそれを主の宮に働く木工と建築師に払い、三 石工および石切りに払い、またそれをもつて主の宮の破れを繕う材木と切り石を買い、主の宮を繕うために用いるすべての物のために費した。三 ただし、主の宮にはいつてくるその銀をもつて主の宮のために銀のたらい、心切りばさみ、鉢、ラッパ、金の器、銀の器などを造ることはしなかつた。四 ただこれを

工事をする者に渡して、それで主の宮を繕わせた。二五またその銀を渡して工事をする者に払わせた人々と計算することはしなかった。彼らは正直に事をおこなったからである。二六 愆祭の銀と罪祭の銀は主の宮に、はいらないで、祭司に帰した。

二七 そのころ、スリヤの王ハザエルが上つてきて、ガテを攻めてこれを取った。そしてハザエルがエルサレムに攻め上ろうとして、その顔に向けたとき、一八 ユダの王ヨアシはその先祖、ユダの王ヨシヤバテ、ヨラム、アハジヤが聖別してささげたすべての物、およびヨアシ自身が聖別してささげた物、ならびに主の宮の倉と、主の宮にある金をことごとく取つて、スリヤの王ハザエルに贈つたので、ハザエルはエルサレムを離れて去つた。

一九 ヨアシのその他の事績および彼がしたすべての事は、ユダの王の歴代志の書に記してあるではないか。二〇 ヨアシの家来たちは立つて徒党を結び、シラに下る道にあるミロの家でヨアシを殺した。二三 なわちその家来シメアテの子ヨザカルと、シヨメルの子ヨザバデが彼を撃つて殺し、彼をその先祖と同じく、ダビデの町に葬つた。その子アマジャが代つて王となった。

第一章 ユダの王アハジヤの子ヨアシの第二十三年にエヒウの子エホアハズはサマリヤでイスラエルの王となり、十七年世を治めた。二 彼は主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベア

ムの罪を行いつづけて、それを離れなかった。三 そこで主はイスラエルに対して怒りを発し、エホアハズの治世の間、絶えずイスラエルをスリヤの王ハザエルの手にわたし、またハザエルの子ベネハダデの手にわたされた。

四 しかしエホアハズが主に願ひ求めたので、主はついにこれを聞き入れられた。スリヤの王によつて悩まされたイスラエルの悩みを見られたからである。五 それで主がひとりの救助者をイスラエルに賜つたので、イスラエルの人々はスリヤびとの手をのがれ、前のように自分たちの天幕に住むようになった。六 それにもかかわらず、彼らはイスラエルに罪を犯させたヤラベアムの家の罪を離れず、それを行いつづけた。またアシラの像もサマリヤに立つたままであつた。七 さきにスリヤの王が彼らを滅ぼし、踏み砕くちりのようにしたのでエホアハズの軍勢で残つたものは、ただ騎兵五十人、戦車十両、歩兵一万人のみであつた。八 エホアハズのその他の事績と、彼がしたすべての事およびその武勇は、イスラエルの王の歴代志の書に記してあるではないか。九 エホアハズは先祖たちと共に眠つたので、彼をサマリヤに葬つた。その子ヨアシが代つて王となった。

二〇 ユダの王ヨアシの第三十七年に、エホアハズの子ヨアシはサマリヤでイスラエルの王となり、十六年世を治めた。二 彼は主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムのものもろの罪を離れ

ず、それに歩んだ。二ヨアシのその他の事績と、彼がしたすべての事およびユダの王アマジヤと戦ったその武勇は、イスラエルの王の歴代志の書に記されるではないか。三ヨアシは先祖たちと共に眠って、ヤラベアムがその位に座した。そしてヨアシはイスラエルの王たちと同じくサマリヤに葬られた。

一四さてエリシャは死ぬ病氣にかかっていたが、イスラエルの王ヨアシは下つてきて彼の顔の上に涙を流し、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と言った。一五エリシャは彼に「弓と矢を取りなさい」と言ったので、弓と矢を取った。一六エリシャはまたイスラエルの王に「弓に手をかけなさい」と言ったので、手をかけた。するとエリシャは自分の手を王の手の上におき、一七「東向きの窓をあけなさい」と言ったので、それをあけると、エリシャはまた「射なさい」と言った。彼が射ると、エリシャは言った、「主の救の矢、スリヤに対する救の矢。あなたはアベクでスリヤびとを撃ち破り、彼らを滅ぼしつくすであろう」。一八エリシャはまた「矢を取りなさい」と言ったので、それを取った。エリシャはまたイスラエルの王に「それをもって地を射なさい」と言ったので、三度射てやめた。一九すると神の人は怒って言った、「あなたは五度も六度も射るべきであった。そうしたならば、あなたはスリヤを撃ち破り、それを滅ぼしつくすことができたであろう。しかし今あなたはそう

しなかったので、スリヤを撃ち破ることはただ三度だけであろう」。

二〇こうしてエリシャは死んで葬られた。さてモアブの略奪隊は年が改まるごとに、国にはいつて来るのを常とした。三時に、ひとりの人を葬ろうとする者があつたが、略奪隊を見たので、その人をエリシャの墓に投げ入れて去った。その人はエリシャの骨に触れるとすぐ生きかえって立ちあがった。

二三スリヤの王ハザエルはエホアハズの一生の間、イスラエルの悩ましたが、二三主はアブラハム、イサク、ヤコブと結ばれた契約のゆえにイスラエルの恵み、これをあわれみ、これを顧みて滅ぼすことを好まず、なおこれをみ前から捨てられなかった。

二四スリヤの王ハザエルはついに死んで、その子ベネハダデが代つて王となつた。二五そこでエホアハズの子ヨアシは、父エホアハズがハザエルに攻め取られた町々を、ハザエルの子ベネハダデの手から取り返した。すなわちヨアシは三度彼を撃ち破つて、イスラエルの町々を取り返した。

## 第一章

二イスラエルの王エホアハズの子ヨアシの第二年に、ユダの王ヨアシの子アマジヤが王となつた。二彼は王となつた時二十五歳で、二十九年の間エルサレムで世を治めた。その母はエルサレムの出身で、名をエホアダンといった。三アマジヤは主の目にかなう事



をおこなったが、先祖ダビデのようではなかった。彼はすべての事を父ヨアシがおこなったようにおこなった。四ただし高き所は除かなかったので、民はなおその高き所で犠牲をささげ、香をたいた。五彼は国が彼の手のうちに強くなった時、父ヨアシ王を殺害した家来たちを殺したが、六その殺害者の子供たちは殺さなかった。これはモーセの律法の書にしろされてゐる所に従つたのであつて、そこに主は命じて「父は子のゆえに殺さるべきではない。子は父のゆえに殺さるべきではない。おの自分の罪のゆえに殺さるべきである」と言われている。七アマジャはまた塩の谷でエドムびと一万人を殺した。またセラを攻め取つて、その名をヨクテルと名づけたが、今日までそのとおりである。

八そこでアマジャがエヒウの子エホアハズの子であるイスラエルの王ヨアシに使者をつかわして、「さあ、われわれは互に顔を合わせよう」と言わたので、九イスラエルの王ヨアシはユダの王アマジャに言い送つた、「かつてレバノンのいばらがレバノンの香柏に、『あなたの娘をわたしのむすこの妻にください』と言ひ送つたことがあつたが、レバノンの野獣がとおつて、そのいばらを踏み倒した。一〇あなたは太いエドムを撃つて、心にたかぶつてゐるが、その榮譽に満足して家にとどまりなさい。何ゆえ、あなたは災をひき起して、自分もユダも共に滅びるような事をするのですか」。

二しかしアマジャが聞きいれなかったので、イスラエルの王ヨアシは上つてきた。そこで彼とユダの王アマジャはユダのベテシメシで互に顔をあわせたが、三ユダはイスラエルに敗られて、おのおのその天幕に逃げ帰つた。四イスラエルの王ヨアシはアハジャの子ヨアシの子であるユダの王アマジャをベテシメシで捕え、エルサレムにきて、エルサレムの城壁をエフライムの門から隅の門まで、おおよそ四百キュビトにわたつてこわし、五また主の宮と王の家の倉にある金銀およびもろもろの器をことごとく取り、かつ人質をとつてサマリヤに帰つた。

六ヨアシのその他の事績と、その武勇および彼がユダの王アマジャと戦つた事は、イスラエルの王の歴代志の書にしるされてゐるではないか。七ヨアシはその先祖たちと共に眠つて、イスラエルの王たちと共にサマリヤに葬られ、その子ヤラバムが代つて王となつた。

八ヨアシの子であるユダの王アマジャは、エホアハズの子であるイスラエルの王ヨアシが死んで後、なお十五年生きながらえた。九アマジャのその他の事績は、ユダの王の歴代志の書にしるされてゐるではないか。一〇時に人々がエルサレムで徒党を結び、彼に敵対したので、彼はラキシに逃げていったが、その人々はラキシに人をつかわして彼をそこで殺させた。一一人々は彼を馬に載せて運んできて、エルサレムで彼を先祖たちと共にダビデの町に葬つた。二そしてユダの民は皆アザリヤを父アマジ

ヤの代りに王とした。時に年十六歳であつた。三彼はエラテの町を建て、これをユダに復帰させた。これはかの王がその先祖たちと共に眠った後であつた。

三 ユダの王ヨアシの子アマジヤの第十五年に、イスラエルの王ヨアシの子ヤラバアムがサマリヤで王となつて四十一年の間、世を治めた。四 彼は主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラバアムの罪を離れなかつた。五 彼はハマテの入口からアラバの海まで、イスラエルの領域を回復した。イスラエルの神、主がガテヘベルのアミッタイの子である、そのしもべ預言者ヨナによつて言われた言葉のとおりである。六 主はイスラエルの悩みの非常に激しいのを見られた。そこにはつなかれた者も、自由な者もなくなり、またイスラエルを助ける者もいなかった。七 しかし主はイスラエルの名を天が下から消し去ろうとは言われなかつた。そして彼らをヨアシの子ヤラバアムの手によつて救われた。八 ヤラバアムのその他の事績と、彼がしたすべての事およびその武勇、すなわち彼が戦争をした事および、かつてユダに属していたダマスコとハマテを、イスラエルに復帰させた事は、イスラエルの王の歴代志の書に記されてゐるではないか。九 ヤラバアムはその先祖であるイスラエルの王たちと共に眠つて、その子ゼカリヤが代つて王となつた。

第一五章 イスラエルの王ヤラバアムの第二十二

七年に、ユダの王アマジヤの子アザリヤが王となつた。二 彼が王となつた時は十六歳で、五十二年の間エルサレムで世を治めた。その母はエルサレムの出身で、名をエコリアといつた。三 彼は主の目になう事を行い、すべての事を父アマジヤが行つたようになつた。四 ただし高き所は除かなかつたので、民はなおその高き所で犠牲をささげ、香をたいた。五 主が王を撃たれたので、その死ぬ日まで、らい病人となつて、離れ家に住んだ。六 王の子ヨタムが家の事を管理し、国の民をさばいた。七 アザリヤのその他の事績と、彼がしたすべての事は、ユダの王の歴代志の書に記されてゐるではないか。八 アザリヤはその先祖たちと共に眠つたので、彼をダビデの町にその先祖たちと共に葬つた。その子ヨタムが代つて王となつた。

ハ ユダの王アザリヤの第三十八年にヤラバアムの子ゼカリヤがサマリヤでイスラエルの王となり、六か月世を治めた。九 彼はその先祖たちがおこなつたように主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラバアムの罪を離れなかつた。一〇 ヤベシの子シヤルムが徒党を結んで彼に敵し、イブレアムで彼を撃ち殺し、彼に代つて王となつた。二 ゼカリヤのその他の事績は、イスラエルの王の歴代志の書に記されてゐる。三 主はかつてエヒウに、「あなたの子孫は四代までイスラエルの位に座するであろう」と告げられたが、はたしてそのと

おりになった。

三 ヤベシの子シャルムはユダの王ウジヤの第三十九年に王となり、サマリヤで一か月世を治めた。二四 時にガデの子メナヘムがテルザからサマリヤに上つてきて、ヤベシの子シャルムをサマリヤで撃ち殺し、彼に代つて王となった。二五 シャルムのその他の事績と、彼が徒党を結んだ事は、イスラエルの王の歴代志の書に記してある。

二六 その時メナヘムはテルザから進んで、タツプアと、そのうちにいるすべての者、およびその領域を撃つた。すなわち彼らが彼のために開かなかったので、これを撃つて、そのうちの妊娠の女をことごとく引き裂いた。

二七 ユダの王アザリヤの第三十九年に、ガデの子メナヘムはイスラエルの王となり、サマリヤで十年の間、世を治めた。二八 彼は主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪を一生の間、離れなかった。二九 時にアッスリヤの王ブルが国に攻めてきたので、メナヘムは銀一千タラントをブルに与えた。これは彼がブルの助けを得て、国を自分の手のうちに強くするためであった。三〇 すなわちメナヘムはその銀をイスラエルのすべての富める者に課し、その人々におのおの銀五十シケルを出させてアッスリヤの王に与えた。こうしてアッスリヤの王は国にとどまらないうで帰っていった。三二 メナヘムのその他の事績と彼がしたすべての事は、イスラエルの王の歴代志の書に記してあるではない。

か。三三 メナヘムは先祖たちと共に眠り、その子ベカヒヤが代つて王となった。

三三 メナヘムの子ベカヒヤはユダの王アザリヤの第五十年に、サマリヤでイスラエルの王となり、二年の間、世を治めた。三四 彼は主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪を離れなかった。三五 時に彼の副官であつたレマリヤの子ベカが、ギレアドびと五十人と共に徒党を結んで彼に敵し、サマリヤの、王の宮殿の天守で彼を撃ち殺した。すなわちベカは彼を殺し、彼に代つて王となった。三六 ベカヒヤのその他の事績と彼がしたすべての事は、イスラエルの王の歴代志の書に記してある。

三七 レマリヤの子ベカはユダの王アザリヤの第五十二年に、サマリヤでイスラエルの王となり、二十年の間、世を治めた。三八 彼は主の目の前に悪をおこない、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪を離れなかった。

三九 イスラエルの王ベカの世に、アッスリヤの王テグラテピレセルが来て、イヨン、アベル・ベテマアカ、ヤノア、ケデシ、ハズル、ギレアデ、ガリラヤ、ナフタリの全地を取り、人々をアッスリヤへ捕え移した。四〇 時にエラの子ホセアは徒党を結んで、レマリヤの子ベカに敵し、彼を撃ち殺し、彼に代つて王となった。これはウジヤの子ヨタムの第二十年であつた。三二 ベカのその他の事績と彼



がしたすべての事は、イスラエルの王の歴代志の書に  
るされている。

三 レマリヤの子イスラエルの王ベカの第二年に、ユダ  
の王ウジヤの子ヨタムが王となった。三 彼は王となつた  
時二十五歳であつたが、エルサレムで十六年の間、世を  
治めた。母はザドクの娘で、名をエルシャといつた。  
言 彼は主の目にかなう事を行い、すべて父ウジヤの行つ  
たようにおこなつた。三五 ただし高き所は除かなかつたの  
で、民はなおその高き所で犠牲をささげ、香をたいた。  
彼は主の宮の上の門を建てた。三六 ヨタムのその他の事績  
と彼がしたすべての事は、ユダの王の歴代志の書に  
されてゐるではないか。三七 そのころ、主はスリヤの王レ  
ヂンとレマリヤの子ベカをユダに攻めこさせられた。  
三八 ヨタムは先祖たちと共に眠つて、その先祖ダビデの町  
に先祖たちと共に葬られ、その子アハズが代つて王と  
なつた。

第一 六章 レマリヤの子ベカの第十七年にユダ

の王ヨタムの子アハズが王となつた。ニアハズは王と  
なつた時二十歳で、エルサレムで十六年の間、世を治め  
たが、その神、主の目にかなう事を先祖ダビデのよう  
には行わなかつた。三 彼はイスラエルの王たちの道に歩み、  
また主がイスラエルの人々の前から追ひ払われた異邦人  
の憎むべきおこないにしたがつて、自分の子を火に焼い  
てささげ物とした。四 かつ彼は高き所、また丘の上、す

べての青木の下で犠牲をささげ、香をたいた。

五 そのころ、スリヤの王レヂンおよびレマリヤの子で  
あるイスラエルの王ベカがエルサレムに攻め上つて、ア  
ハズを囲んだが、勝つことができなかった。六 その時エ  
ドムの王はエラテを回復してエドムの所領とし、エダの  
人々をエラテから追ひ出した。そしてエドムびとがエラ  
テにきて、そこに住み、今日に至つてゐる。七 そこでア  
ハズは使者をアッスリヤの王テグラテピレセルにつかわ  
して言させた、「わたしはあなたのしもべ、あなたの子で  
す。スリヤの王とイスラエルの王がわたしを攻め囲んで  
います。どうぞ上つてきて、彼らの手からわたしを救い  
出してください」。八 そしてアハズは主の宮と王の家の倉  
にある金と銀をとり、これを贈り物としてアッスリヤの  
王におくつたので、九 アッスリヤの王は彼の願いを聞き  
入れた。すなわちアッスリヤの王はダマスコに攻め上つ  
て、これを取り、その民をキルに捕え移し、またレヂン  
を殺した。

一〇 アハズ王はアッスリヤの王テグラテピレセルに会お  
うとダマスコへ行つたが、ダマスコにある祭壇を見たの  
で、アハズ王はその祭壇の作りにしたがつて、その詳し  
い図面と、ひな型とを作つて、祭司ウリヤに送つた。二 そ  
こで祭司ウリヤはアハズ王がダマスコから送つたものに  
したがつて祭壇を建てた。すなわち祭司ウリヤはアハズ  
王がダマスコから帰るまでにそのとおりに作つた。三 王

はダマスコから帰ってきて、その祭壇を見、祭壇に近づいてその上に登り、<sup>一三</sup>燔祭と素祭を焼き、<sup>一四</sup>灌祭を注ぎ、<sup>一五</sup>酬恩祭の血を祭壇にそそぎかけた。<sup>一六</sup>彼はまた主の前にあつた青銅の祭壇を宮の前から移した。すなわちそれを新しい祭壇と主の宮の間から移して、新しい祭壇の北の方にすえた。<sup>一七</sup>そしてアハズ王は祭司ウリヤに命じて言った、「朝の燔祭と夕の素祭および王の燔祭とその素祭、ならびに國中の民の燔祭とその素祭および灌祭は、この大きな祭壇の上で焼きなさい。また燔祭の血と犠牲の血はすべてこれにそそぎかけなさい。あの青銅の祭壇を、わたしは伺いを立てるのに用いよう」。<sup>一八</sup>祭司ウリヤはアハズ王がすべて命じたとおりにおこなつた。<sup>一九</sup>またアハズ王は台の鏡板を切り取つて、洗盤を上から移し、また海をその下にある青銅の牛の上からおろして、石の座の上にすえ、<sup>二〇</sup>また宮のうちに造られていた安息日用のおおいのある道、および王の用いる外の入口をアッスリヤの王のために主の宮から除いた。<sup>二一</sup>アハズのその他の事績は、ユダの王の歴代志の書に記してあるではないか。<sup>二二</sup>アハズは先祖たちと共に眠つて、ダビデの町にその先祖たちと共に葬られ、その子ヒゼキヤが代つて王となつた。

# 第一章

ユダの王アハズの第十二年にエラの子ホセアが王となり、サマリヤで九年の間、イスラエルを治めた。<sup>一</sup>彼は主の目の前に悪を行つたが、彼以前の

イスラエルの王たちのようではなかつた。<sup>二</sup>アッスリヤの王シャルマネセルが攻め上つたので、ホセアは彼に隸属して、みつぎを納めたが、<sup>三</sup>アッスリヤの王はホセアがついに自分にそむいたのを知つた。それはホセアが使者をエジプトの王ソにつかわし、また年々納めていたみつぎを、アッスリヤの王に納めなかつたからである。そこでアッスリヤの王は彼を監禁し、獄屋につないだ。<sup>四</sup>そしてアッスリヤの王は彼を攻め上つて國中を侵し、サマリヤに上つてきて三年の間、これを攻め困んだ。<sup>五</sup>ホセアの第九年になつて、アッスリヤの王はついにサマリヤを取り、イスラエルの人々をアッスリヤに捕えていつて、ハラと、ゴザンの川ハボルのほとりと、メデアの町々においた。

この事が起つたのは、イスラエルの人々が、自分たちをエジプトの地から導き上つて、エジプトの王パロの手をのがれさせられたその神、主にむかつて罪を犯し、他の神々を敬い、<sup>一</sup>主がイスラエルの人々の前から追ひ払われた異邦人のならわしに従つて歩み、またイスラエルの王たちが定めたならわしに従つて歩んだからである。<sup>二</sup>イスラエルの人々はその神、主にむかつて正しからぬ事をひそかに行い、見張台から堅固な町に至るまで、すべての町々に高き所を建て、<sup>三</sup>またすべての高い丘の上、すべての青木の下に石の柱とアシラ像を立て、<sup>四</sup>主が彼らの前から捕え移された異邦人がしたように、すべ

ての高き所で香をたき、悪事を行つて、主を怒らせた。  
 三また主が彼らに「あなたがたはこの事をしてはならない」と言われたのに偶像に仕えた。三主はすべての預言者、すべての先見者によつてイスラエルとユダを戒め、  
 「翻つて、あなたがたの悪い道を離れ、わたしがあなたがたの先祖たちに命じ、またわたしのしもべである預言者たちによつてあなたがたに伝えたすべての律法のおりに、わたしの戒めと定めとを守れ」と仰せられたが、  
 四彼らは聞きいれず、彼らの先祖たちがその神、主を信じないで、強情であつたように、彼らは強情であつた。  
 五そして彼らは主の定めを捨て、主が彼らの先祖たちと結ばれた契約を破り、また彼らに与えられた警告を軽んじ、かつむなしい偶像に従つてむなしくなり、また周囲の異邦人に従つた。これは主が、彼らのようになつてはならないと彼らに命じられたものである。六彼らはその神、主のすべての戒めを捨て、自分のために二つの子牛の像を鑄て造り、またアシラ像を造り、天の万象を拝み、かつバアルに仕え、七またそのむすこ、娘を火に焼いてささげ物とし、占いおよびまじないをなし、主の目の前に悪をおこなうことに身をゆだねて、主を怒らせた。八それゆゑ、主は大いにイスラエルを怒り、彼らをみ前から除かれたので、ユダの部族のほか残つた者はなかつた。

九ところがユダもまたその神、主の戒めを守らず、イ

スラエルが定めたならわしに歩んだので、二〇主はイスラエルの子孫をことごとく捨て、彼らを苦しめ、彼らを略奪者の手にわたして、ついに彼らをみ前から打ちすてられた。

三主はイスラエルをダビデの家から裂き離されたので、イスラエルはネバテの子ヤラベアムを王としたが、ヤラベアムはイスラエルに、主に従うことをやめさせ、大きな罪を犯させた。三イスラエルの人々がヤラベアムのおこなつたすべての罪をおこない続けて、それを離れなかつたので、三ついに主はそのしもべである預言者たちによつて言われたように、イスラエルをみ前から除き去られた。こうしてイスラエルは自分の国からアッスリヤに移されて今日に至つてゐる。

四かくてアッスリヤの王はバビロン、クタ、アワ、ハマテおよびセパルワイムから人々をつれてきて、これをイスラエルの人々の代りにサマリヤの町々におらせたので、その人々はサマリヤを領有して、その町々に住んだ。五彼らがそこに住み始めた時、主を敬うことをしなかつたので、主は彼らのうちにししを送り、ししは彼らのうちの数人を殺した。六そこで人々はアッスリヤの王に告げて言つた、「あなたがたが移してサマリヤの町々におらせられたあの国々の民は、その地の神のおきてを知らないゆゑに、その神は彼らのうちにししを送り、ししは彼らを殺した。これは彼らが、その地の神のおきてを知らない



ためです。二七アツスリヤの王は命じて言った、「あなたがたがあそこから移した祭司のひとりをおそこへ連れて行きなさい。彼をおそこへやって住まわせ、その国の神のおきてをその人々に教えさせなさい」。二八そこでサマリヤから移された祭司のひとりに来てベテルに住み、どのようにに主を敬うべきかを彼らに教えた。

二九しかしその民はおの自分の神々を造って、それをサマリヤびとが造った高き所の家に安置した。民は皆住んでいる町々でそのようにおこなった。三〇すなわちバビロンの人々はスコテ・ベノテを造り、クタの人々はネルガルを造り、ハマテの人々はアシマを造り、三アワの人々はニブハズとタルタクを造り、セバルワイムびとはその子をお火に焼いて、セバルワイムの神アデランメレクおよびアナンメレクにささげた。三二彼らはまた主を敬い、自分たちのうちから一般の民を立てて高き所の祭司としたので、その人々は高き所の家で勤めをした。三三このように彼らは主を敬ったが、また彼らが出てきた国々のならわしにしたがって、自分たちの神々にも仕えた。三四今日に至るまで彼らは先のならわしにしたがっておこなっている。

彼らは主を敬わず、また主がイスラエルと名づけられたヤコブの子孫に命じられた定めにも、おきてにも、律法にも、戒めにも従わない。三五主はかつて彼らと契約を結び、彼らに命じて言われた、「あなたがたは他の神々を

敬ってはならない。また彼らを拝み、彼らに仕え、彼らに犠牲をささげてはならない。三六ただ大きな力と伸べた腕とをもって、あなたがたをエジプトの地から導き上った主のみを敬い、これを拝み、これに犠牲をささげなければならぬ。三七またあなたがたのために書きしるされた定めと、おきてと、律法と、戒めとを、慎んで常に守らなければならぬ。三九他の神々を敬ってはならない。三九わたしがあなたがたと結んだ契約を忘れてはならない。四〇また他の神々を敬ってはならない。三九ただあなたがたの神、主を敬わなければならない。主はあなたがたをそのすべての敵の手から救い出されるであろう。四〇しかし彼らは聞きいれず、かえって先のならわしにしたがっておこなった。

四二このように、これらの民は主を敬い、またその刻んだ像にも仕えたが、その子たちも、孫たちも同様であつて、彼らはその先祖がおこなったように今日までおこなっている。

第一八章 イスラエルの王エラの子ホセアの第三年にユダの王アハズの子ヒゼキヤが王となった。二彼は王となった時二十五歳で、エルサレムで二十九年の間、世を治めた。その母はゼカリヤの娘で、名をアビといった。ミヒゼキヤはすべて先祖ダビデがおこなったように主の目にかなう事を行い、四高き所を除き、石柱をこわし、アシラ像を切り倒し、モーセの造った青銅の

へびを打ち砕いた。イスラエルの人々はこの時までそのへびに向かつて香をたいていたからである。人々はこれをネホシタンと呼んだ。五ヒゼキヤはイスラエルの神主に信頼した。そのために彼のあとにも彼の先にも、ユダのすべての王のうちに彼に及ぶ者はなかった。六すなわち彼は固く主に従って離れることなく、主がモーセに命じられた命令を守った。七主が彼と共におられたので、すべて彼が出て戦うところで功をあらわした。彼はアッスリヤの王にそむいて、彼に仕えなかった。八彼はペリシテびとを撃ち敗って、ガザとその領域にまで達し、見張台から堅固な町にまで及んだ。

九ヒゼキヤ王の第四年すなわちイスラエルの王エラの子ホセアの第七年に、アッスリヤの王シャルマネセルはサマリヤに攻め上って、これを囲んだが、一〇三年の後ついにこれを取った。サマリヤが取られたのはヒゼキヤの第六年で、それはイスラエルの王ホセアの第九年であった。二アッスリヤの王はイスラエルの人々をアッスリヤに捕えていつて、ハラと、ゴザンの川ハボルのほとりと、メデアの町々に置いた。三これは彼らがその神、主の言葉にしたがわず、その契約を破り、主のしもべモーセの命じたすべての事に耳を傾けず、また行わなかったからである。

四ユダの王ヒゼキヤは人をラキシにつかわしてアッスリヤの王に言った、「わたしは罪を犯しました。どうぞ引き上げてください。わたしに課せられることはなんでもいたします」。アッスリヤの王は銀三百タラントと金三十タラントをユダの王ヒゼキヤに課した。五ヒゼキヤは主の宮と王の家の倉とにある銀をことごとく彼に与えた。六この時ユダの王ヒゼキヤはまた主の神殿の戸および柱から自分が着せた金をはぎ取って、アッスリヤの王に与えた。七アッスリヤの王はまたタルタン、ラブサリスおよびラブシャケを、ラキシから大軍を率いてエルサレムにいるヒゼキヤ王のもとにつかわした。彼らは上つてエルサレムにきた。彼らはエルサレムに着くと、布さらし場に行く大路に沿っている上の池の水道のかたわらへ行って、そこに立った。八そして彼らが王を呼んだので、ヒルキヤの子である宮内卿エリアキム、書記官セブナ、およびアサフの子である史官ヨアが彼らのところに出てきた。

九ラブシャケは彼らに言った、「ヒゼキヤに言いなさい、『大王、アッスリヤの王はこう仰せられる。あなたが頼みとする者は何か。一〇口先だけの言葉が戦争をする計略と力だと考えるのか。あなたは今だれにたよつて、わたしにそむいたのか。三今あなたは、あの折れかけている葦のつえ、エジプトを頼みとしているが、それは人よりもよいかかる時、その人の手を刺し通すであらう。エジブ

トの王バロはすべて寄り頼む者にそのようにする。三十一かしあなたがもし「われわれは、われわれの神、主を頼む」とわたしに言うのであれば、その神はヒゼキヤがユダとエルサレムに告げて、「あなたがたはエルサレムで、この祭壇の前に礼拝しなければならぬ」と言つて、その高き所と祭壇とを除いた者ではないか。三十二あ、わたしの主君アッスリヤの王とかけをせよ。もしあなたがたの方に乗る人があるならば、わたしは馬二千頭を与えよう。三十三あなたはエジプトを頼み、戦車と騎兵を請ひ求めてゐるが、わたしの主君の家来のうちの最も小さい一隊長でさえ、どうして撃退することができようか。三十四わたしがこの所を滅ぼすために上つてきたのは、主の許しなしにしたことであらうか。主がわたしにこの地に攻め上つてこれを滅ぼせと言われたのだ。』

三十五その時ヒルキヤの子エリアキムおよびセブナとヨアはラブシャケに言った、「どうぞ、アラム語でも何でもに話してください。わたしたちは、それがわかるからです。城壁の上にいる民の聞いてゐるところで、わたしたちにユダヤの言葉で話さないでください。三十六しかしラブシャケは彼らに言った、「わたしの主君は、あなたの主君とあなたにだけでなく、城壁の上に座してゐる人々にも、この言葉を告げるためにわたしをつかわしたのではないか。彼らも、あなたがたと共に自分の糞尿を食い飲みするに至るであらう。』

三十七そしてラブシャケは立ちあがり、ユダヤの言葉で大声に呼ばわつて言った、「大王、アッスリヤの王の言葉を聞け。三十八王はこう仰せられる、『あなたがたはヒゼキヤに欺かれてはならない。彼はあなたがたをわたしの手から救ひだすことはできない。三十九ヒゼキヤが「主は必ずわれわれを救ひ出される。この町はアッスリヤ王の手に陥ることはない」と言つても、あなたがたは主を頼みとしてはならない。』四十あなたがたはヒゼキヤの言葉を聞いてはならない。アッスリヤの王はこう仰せられる、『あなたがたはわたしと和解して、わたしに降服せよ。そうすればあなたがたはおの自分のぶどうの実を食べ、おの自分の井戸の水を飲むことができるであらう。三十一やがてわたしが来て、あなたがたを一つの国へ連れて行く。それはあなたがたの国のように穀物とぶどう酒のある地、パンとぶどう畑のある地、オリブの木と蜜のある地である。あなたがたは生きながらえることができ、死ぬことはない。ヒゼキヤが「主はわれわれを救われる」と言つて、あなたがたを惑わしても彼に聞いてはならない。三十二諸国民の神のうち、どの神がその国をアッスリヤの王の手から救つたか。三十三ハマテやアルパデの神々はどこにゐるか。セバルワイム、ヘナおよびイワの神々はどこにゐるか。彼らはサマリヤをわたしの手から救ひ出したか。三十四国々のすべての神々のうち、その国をわたしの手から



救い出した者があつたか。主がどうしてエルサレムをわたしの手から救い出すことができたか。』

三六 しかし民は黙して、ひと言も彼に答えなかった。王が命じて「彼に答えてはならない」と言っておいたからである。三七 こうしてヒルキヤの子である宮内卿エリアキム、書記官セブナ、およびアサフの子である史官ヨアは衣を裂き、ヒゼキヤのもとに来て、ラブシヤケの言葉を彼に告げた。

第一九章 ヒゼキヤ王はこれを聞いて、衣を裂

き、荒布を身にまとい主の宮に入り、二宮内卿エリアキムと書記官セブナおよび祭司のうちの年長者たちに荒布をまとわせて、アモツの子預言者イザヤのもとにつかわした。三彼らはイザヤに言った、「ヒゼキヤはこう申されます、『きょうは悩みと、懲らしめと、はずかしめの日です。胎児がまさに生れようとして、これを産み出す力がないのです。四 あなたの神、主はラブシヤケがその主君アッスリヤの王につかわされて、生ける神をそしめたのもろもろの言葉を聞かれたかもしれませんが。そしてあなたの神、主はその聞いた言葉をとがめられるかもしれません。それゆえ、この残っている者のために祈をささげてください』。五 ヒゼキヤ王の家来たちがイザヤのもとに来たとき、六 イザヤは彼らに言った、「あなたがたの主君にこう言いなさい、『主はこう仰せられる、アッスリヤの王の家来たちが、わたしをそしった言葉を聞いて恐れる

には及ばない。七 見よ、わたしは一つの霊を彼のうちに送って、一つのうわさを聞かせ、彼を自分の国へ帰らせて、自分の国でつるぎに倒れさせるであらう』。

八 ラブシヤケは引き返して、アッスリヤの王がリブナを攻めているところへ行つた。彼が王のラキシを去つたことを聞いたからである。九 この時アッスリヤの王はエチオピアの王テルハカについて、「彼はあなたと戦うために出てきた」と人々がいうのを聞いたので、再び使者をヒゼキヤにつかわして言った、一〇「ユダの王ヒゼキヤにこう言いなさい、『あなたは、エルサレムはアッスリヤの王の手に陥ることはない、と言うあなたへの信頼する神に欺かれてはならない。二 あなたはアッスリヤの王たちがもろもろの国々にした事、彼らを全く滅ぼした事を聞いている。三 どうしてあなたが救われることができようか。四 わたしの父たちはゴザン、ハラシ、レゼフ、およびテラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、その国々の神は彼らを救つたか。五 ハマテの王、アルパデの王、セバルワイムの町の王、ヘナの王およびイワの王はどこにいるのか』。

六 ヒゼキヤは使者の手から手紙を受け取ってそれを読み、主の宮にのぼって行って、主の前にそれをひろげ、七 五としてヒゼキヤは主の前に祈って言った、「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、主よ、地のすべての国のうちで、ただあなただけが神でいらされます。

あなたは天と地を造られました。主よ、耳を傾けて聞いてください。主よ、目を開いてごらんください。セナクリブが生ける神をそしるために書き送った言葉をお聞きください。主よ、まことにアッスリヤの王たちはもろもろの民とその国々を滅ぼし、またその神々を火に投げ入れました。それらは神ではなく、人の手の作ったもので、木や石だから滅ぼされたのです。われわれの神、主よ、どうぞ、今われわれを彼の手から救い出してください。そうすれば地の国々は皆、主であるあなただけ、神でいらせられることを知ようになるでしょう。その時アモツの子イザヤは人をつかわしてヒゼキヤに言った、「イスラエルの神、主はこう仰せられる、『アッスリヤの王セナクリブについてあなたがわたしに祈ったことは聞いた』。主が彼について語られた言葉はこうである、

『処女であるシオンの娘は

あなたを侮り、あなたをあざける。

エルサレムの娘は

あなたのうしろで頭を振る。

あなたはだれをそしり、だれをのしったのか。

あなたはだれにむかって声をあげ、

目を高くあげたのか。

イスラエルの聖者にむかってしたのだ。

あなたは使者をもって主をそしって言った、

『わたしは多くの戦車をひきいて山々の頂にのぼり、レバノンの奥に行き、エタナの松の木の間にたけの高い香柏と最も良いとすぎを切り倒し、またその果の野営地に行き、その密林にはいった。わたしは井戸を掘って外国の水を飲んだ。わたしは足の裏で、エジプトのすべての川を踏みからした。あなたは聞かなかったか、昔わたしがこれを定めたことを。堅固な町々をあなたが荒塚とすることも、いにしえの日からわたしが計画して今これをおこなうのだ。そのうちに住む民は力弱くおののき、恥をいだいて、野の草のように、青菜のようになり、育たないで枯れる屋根の草のようになった。わたしはあなたのすわること、出入りすること、わたしにむかって怒り叫んだことをも知っている。あなたがわたしにむかって怒り叫んだことと、あなたの傲慢がわたしの耳にはいったため、わたしはあなたの鼻に輪をつけ、あなたの口にくつわをはめて、あなたをもときた道へ引きもどすであろう。』あなたはわたしに与えるしるしはこれである。すなわち、こ

としは落ち穂からはえたものを食べ、二年目にはまたその落ち穂からはえたものを食べ、三年目には種をまき、刈り入れ、ぶどう畑を作つてその実を食べるであらう。ユダの家ののがれて残る者は再び下に根を張り、上に実を結ぶであらう。三すなわち残る者がエルサレムから出てき、のがれた者がシオンの山から出て来るであらう。主の熱心がこれをされるであらう。

三それゆゑ、主はアッスリヤの王について、こう仰せられる、『彼はこの町にこない、またここに矢を放たない、盾をもつてその前に来ることなく、また塁を築いてこれを攻めることはない。三彼は来た道を帰つて、この町に、はいることはない。主がこれを言う。三わたしは自分のため、またわたしのしもべダビデのためにこの町を守つて、これを救うであらう。』

三その夜、主の使がでて、アッスリヤの陣營で十八万五千人を撃ち殺した。人々が朝早く起きて見ると、彼らは皆、死体となつていた。三アッスリヤの王セナケリブは立ち去り、帰つて行つてニネベにいたが、三その神ニスロクの神殿で礼拝していた時、その子アデランメレクとシヤレゼルが、つるぎをもつて彼を殺し、ともにアララテの地へ逃げて行つた。そこでその子エサルハドンが代つて王となつた。

第二〇章 一そのころ、ヒゼキヤは病氣になつて死にかかつていた。アモツの子預言者イザヤは彼のところ

ろにきて言つた、『主はこう仰せられます、『家の人に遺言をなさい。あなたは死にます。生きながらえることはできません。』二そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて主に祈つて言つた、三『ああ主よ、わたしは眞実と眞心をもつてあなたの前に歩み、あなたの目にかなうことをおこなつたのをどうぞ思い起してください。』そしてヒゼキヤは激しく泣いた。四イザヤがまだ中庭を出ないうちに主の言葉が彼に臨んだ、五『引き返して、わたしの民の君ヒゼキヤに言いなさい、『あなたの父ダビデの神、主はこう仰せられる、わたしはあなたの祈を聞き、あなたの涙を見た。見よ、わたしはあなたをいやす。三日目にはあなたは主の宮に上るであらう。』六かつ、わたしはあなたによわいを十五年増す。わたしはあなたと、この町とをアッスリヤの王の手から救ひ、わたしの名のため、またわたしのしもべダビデのためにこの町を守るであらう。』七そしてイザヤは言つた、『干しいちじくのひとかたまりを持つてきて、それを腫物につけさせなさい。そうすれば直るでしょう。』

八ヒゼキヤはイザヤに言つた、『主がわたしをいやされる事と、三日目にわたしが主の家に上ることについて、どんなしるしがありましようか。』九イザヤは言つた、『主が約束されたことを行われることについては、主からのしるしを得られるでしょう。すなわち日影が十度進むか、あるいは十度退くかです。』一〇ヒゼキヤは答えた、



「日影が十度進むことはたやすい事です。むしろ日影を十度退かせてください。」二そこで預言者イザヤが主に呼ばわると、アハズの日時計の上に進んだ日影を、十度退かせられた。

三そのころ、バラダンの子であるバビロンの王メロダクバラダンは、手紙と贈り物を持たせて使節をヒゼキヤにつかわした。これはヒゼキヤが病んでゐることを聞いたからである。三ヒゼキヤは彼らを喜び迎えて、宝物の蔵、金銀、香料、貴重な油および武器倉、ならびにその倉庫にあるすべての物を彼らに見せた。家にある物も、国にある物も、ヒゼキヤが彼らに見せない物は一つもなかった。四その時、預言者イザヤはヒゼキヤ王のもとにきて言った、「あの人々は何を言いましたか。どこからきたのですか」。ヒゼキヤは言った、「彼らは遠い国から、バビロンからきたのです」。五イザヤは言った、「彼らはあなたの家で見ましたか」。ヒゼキヤは答えて言った、「わたしの家にある物を皆見ました。わたしの倉庫のうちには、わたしが彼らに見せない物は一つもありません」。

六そこでイザヤはヒゼキヤに言った、「主の言葉を聞きなさい、一七主は言われる、見よ、すべてあなたの家にある物、および、あなたの先祖たちが今日までに積みたくわえた物の、バビロンに運び去られる日が来る。何も残るものはないであろう。一八また、あなたの身から出る

あなたの子たちも連れ去られ、バビロンの王の宮殿で宦官となるであろう。一九ヒゼキヤはイザヤに言った、「あなたが言われた主の言葉は結構です」。彼は「せめて自分が世にあるあいだ、平和と安全があれば良いことではなからうか」と思ったからである。

二〇ヒゼキヤのその他の事績とその武勇および、彼が貯水池と水道を作つて、町に水を引いた事は、ユダの王の歴代志の書にしるされてゐるではないか。三ヒゼキヤはその先祖たちと共に眠つて、その子マナセが代つて王となった。

第二章 マナセは十二歳で王となり、五十五年の間、エルサレムで世を治めた。母の名はヘフジバとあった。二マナセは主がイスラエルの人々の前から追ひ払われた国々の民の憎むべきおこないにならつて、主の目の前に悪をおこなつた。三彼は父ヒゼキヤがこわした高き所を建て直し、またイスラエルの王アハブがしたようににバアルのために祭壇を築き、アシラ像を造り、かつ天の万象を拜んで、これに仕えた。四また主の宮のうちに数個の祭壇を築いた。これは主が「わたしの名をエルサレムに置こう」と言われたその宮である。五彼はまた主の宮の二つの庭に天の万象のために祭壇を築いた。六またその子を火に焼いてささげ物とし、占いをし、魔術を行い、口寄せと魔法使を用い、主の目の前に多くの悪を行つて、主の怒りを引き起した。七彼はまたアシラ

の彫像を作つて主の宮に置いた。主はこの宮についてダビデとその子ソロモンに言われたことがある、「わたしはこの宮と、わたしがイスラエルのすべての部族のうちから選んだエルサレムとに、わたしの名を永遠に置く。ハモシ、彼らがわたしに命じたすべての事、およびわたしのしもべモーセが命じたすべての律法を守り行ふならば、イスラエルの足を、わたしが彼らの先祖たちに与えた地から、重ねて迷い出させないであろう」。しかし彼らは聞きいれなかった。マナセが人々をいさなつて悪を行つたことは、主がイスラエルの人々の前に滅ぼされた国々の民よりもはなはだしかった。

一〇そこで主はそのしもべである預言者たちによつて言われた、「ユダの王マナセがこれらの憎むべき事を行い、彼の先にあつたアモリびとの行つたすべての事よりも悪い事を行い、またその偶像をもつてユダに罪を犯させたので、ニイスラエルの神、主はこう仰せられる、見よ、わたしはエルサレムとユダに災をくだそうとしてゐる。これを聞く者は、その耳が二つながら鳴るであろう。三わたしはサマリヤをはかつた淵りなわと、アハブの家に用いた下げ振りをエルサレムにほどこし、人が血をぬぐい、これをぬぐつて伏せるように、エルサレムをぬぐい去る。一四わたしは、わたしの嗣業の民の残りを捨て、彼らを敵の手に渡す。彼らはもろもろの敵のえじきとなり、略奪にあうであろう。一五これは彼らの先祖たちがエ

ジプトを出た日から今日に至るまで、彼らがわたしの目の前に悪を行つて、わたしを怒らせたためである」。

一六マナセはまた主の目の前に悪を行つて、ユダに罪を犯させたその罪のほか、罪なき者の血を多く流して、エルサレムのこの果から、かの果にまで満たした。

一七マナセのその他の事績と、彼がおこなつたすべての事およびその犯した罪は、ユダの王の歴代志の書に記されてゐるではないか。一八マナセは先祖たちと共に眠つて、その家の園すなわちウザの園に葬られ、その子アモンが代つて王となった。

一九アモンは王となった時二十二歳であつて、エルサレムで二年の間、世を治めた。母はヨテバのハルツの娘で、名をメシユレメテといつた。二〇アモンはその父マナセのおこなつたように、主の目の前に悪を行つた。二一すなわち彼はすべてその父の歩んだ道に歩み、父の仕えた偶像に仕えて、これを拝み、三先祖たちの神、主を捨てて、主の道に歩まなかつた。二二アモンの家来たちはついに彼に敵して徒党を結び、王をその家で殺したが、三三國の民は、アモン王に敵して徒党を結んだ者をことごとく撃ち殺した。そして國の民はアモンの子ヨシヤを王としてアモンに代らせた。二四アモンのその他の事績は、ユダの王の歴代志の書に記されてゐるではないか。二五アモンはウザの園にある墓に葬られ、その子ヨシヤが代つて王となった。

## 第二章

「ヨシヤは八歳で王となり、エルサレムで三十一年の間、世を治めた。母はボツカテのアダヤの娘で、名をエデダといった。ニヨシヤは主の目にかならう事を行い、先祖ダビデの道に歩んで右にも左にも曲らなかつた。

三ヨシヤ王の第十八年に王はメシユラムの子アザリヤの子である書記官シヤパンを主の宮につかわして言った、「大祭司ヒルキヤのもとへのぼって行って、主の宮にはいつてきた銀、すなわち門を守る者が民から集めたものの総額を彼に数えさせ、五それを工事をつかさどる主の宮の監督者の手に渡させ、彼らから主の宮で工事をする者にそれを渡して、宮の破れを繕わせなさい。六すなわち木工と建築師と石工にそれを渡し、また宮を繕う材木と切り石を買わせなさい。七ただし彼らは正直に事を行うから、彼らに渡した銀については彼らと計算するに及ばない」。

八その時大祭司ヒルキヤは書記官シヤパンに言った、「わたしは主の宮で律法の書を見つけました」。そしてヒルキヤがその書物をシヤパンに渡したので、彼はそれを読んだ。九書記官シヤパンは王のもとへ行き、王に報告して言った、「しもべどもは宮にあつた銀を皆出して、それを工事をつかさどる主の宮の監督者の手に渡ししました」。一〇書記官シヤパンはまた王に告げて「祭司ヒルキヤはわたしに一つの書物を渡しました」と言い、それを王

の前で読んだ。

二王はその律法の書の言葉を聞くと、その衣を裂いた。三そして王は祭司ヒルキヤと、シヤパンの子アヒカムと、ミカヤの子アクボルと、書記官シヤパンと、王の大臣アサヤとに命じて言った、「三」あなたがたは行って、この見つかつた書物の言葉について、わたしのため、民のため、またユダ全国のために主に尋ねなさい。われわれの先祖たちがこの書物の言葉に聞き従わず、すべてわれわれについてしるされている事を行わなかつたために、主はわれわれにむかつて、大いなる怒りを発しておられるからです」。

四そこで祭司ヒルキヤ、アヒカム、アクボル、シヤパンおよびアサヤはシャルムの妻である女預言者ホルダのもとへ行つた。シャルムはハルハスの子であるテクワの子で、衣装べやを守る者であつた。その時ホルダはエルサレムの下町に住んでいた。彼らがホルダに告げたので、五ホルダは彼らに言った、「イスラエルの神、主はこう仰せられます、『あなたがたをわたしにつかわした人に言いなさい。六主はこう言われます、見よ、わたしはユダの王が読んだあの書物のすべての言葉にしたがって、災をこの所と、ここに住んでいる民に下そうとしている。七彼らがわたしを捨てて他の神々に香をたき、自分たちの手で作つたもろもろの物をもつて、わたしを怒らせたからである。それゆえ、わたしはこの所にむかつて怒り



の火を發する。これは消えることがないであろう。』  
 「ただし主に尋ねるために、あなたがたをつかわしたユダの王にはこう言いなさい、『あなたが聞いた言葉についてイスラエルの神、主はこう仰せられます、一あなたは、わたしがこの所と、ここに住んでいる民にむかつて、これは荒地となり、のろいとなるであろうと言うのを聞いた時、心に悔い、主の前にへりくだり、衣を裂いてわたしの前に泣いたゆえ、わたしもまたあなたの言うことを聞いたのであると主は言われる。二それゆえ、見よ、わたしはあなたを先祖たちのもとに集める。あなたは安らかに墓に集められ、わたしがこの所に下すもろもろの災を目に見ることはないであろう。』彼らはこの言葉を王に持ち帰った。

第二章 一そこで王は人をつかわしてユダとエルサレムの長老たちをことごとく集めた。二そして王はユダのもろもろの人々と、エルサレムのすべての住民および祭司、預言者ならびに大小のすべての民を従えて主の宮にのぼり、主の宮で見つかった契約の書の言葉をことごとく彼らに読み聞かせた。三次いで王は柱のかたわらに立って、主の前に契約を立て、主に従って歩み、心をつくし精神をつくして、主の戒めと、あかしと、定めとを守り、この書物にしろされてゐるこの契約の言葉を行ふことを誓った。民は皆その契約に加わった。  
 四こうして王は大祭司ヒルキヤと、それに次ぐ祭司た

ちおよび門を守る者どもに命じて、主の神殿からバアルとアシラと天の万象とのために作ったもろもろの器を取り出させ、エルサレムの外のキデロンの野でそれを焼き、その灰をベテルに持って行かせた。五また、ユダの町々とエルサレムの周囲にある高き所で香をたくためにユダの王たちが任命した祭司たちを廃し、またバアルと日と月と星宿と天の万象とに香をたく者どもをも廃した。六彼はまた主の宮からアシラ像を取り出し、エルサレムの外のキデロン川に持って行って、キデロン川でそれを焼き、それを打ち砕いて粉とし、その粉を民の墓に投げすてた。七また主の宮にあった神殿男娼の家をこわした。そこは女たちがアシラ像のために掛け幕を織る所であつた。八彼はまたユダの町々から祭司をことごとく召しよせ、また祭司が香をたいたゲバからベエルシバまでの高き所を汚し、また門にある高き所をこわした。これらの高き所は町のつかさどるユシアの門の入口にあり、町の門にはいる人の左にあつた。九高き所の祭司たちはエルサレムで主の祭壇にのぼることをしなかったが、その兄弟たちのうちにあつて種入れぬパンを食べた。一〇王はまた、だれもそのむすこ娘を火に焼いて、モレクにささげ物とすることのないように、ベンヒンノムの谷にあるトベテを汚した。二またユダの王たちが太陽にささげて主の宮の門に置いた馬を、境内にある侍従ナタンメレクのへやのかたわらに移し、太陽の車を火で焼いた。

三また王はユダの王たちがアハズの高殿の屋上に造った祭壇と、マナセが主の宮の二つの庭に造った祭壇とをこわして、それを打ち碎き、碎けたものをキデロン川に投げすてた。三また王はイスラエルの王ソロモンが昔シドンびとの憎むべき者アシタロテと、モアブびとの憎むべき者ケモシと、アンモンの人々の憎むべき者ミルコムのためにエルサレムの東、滅亡の山の南に築いた高き所を汚した。四またもろもろの石柱を打ち碎き、アシラ像を切り倒し、人の骨をもつてその所を満たした。

五また、ベテルにある祭壇と、イスラエルに罪を犯させたネベテの子ヤラベアムが造った高き所、すなわちその祭壇と高き所とを彼はこわし、その石を打ち碎いて粉とし、かつアシラ像を焼いた。六そしてヨシヤは身をめぐらして山に墓のあるのを見、人をつかわしてその墓から骨を取らせ、それをその祭壇の上で焼いて、それを汚した。昔、神の人が主の言葉としてこの事を呼ばわり告げたが、そのとおりになった。七その時ヨシヤは「あそこに見える石碑は何か」と尋ねた。町の人々が彼に「あれはあなたがベテルの祭壇に対して行われたこれらの事を、ユダからきて預言した神の人の墓です」と言ったので、八彼は言った、「そのままにして置きなさい。だれもその骨を移してはならない」。それでその骨と、サマリヤからきた預言者の骨には手をつけなかった。九またイスラエルの王たちがサマリヤの町々に造って、主を怒ら

せた高き所の家も皆ヨシヤは取り除いて、彼がすべてベテルに行ったようにこれに行った。二彼はまた、そこにあった高き所の祭司たちを皆祭壇の上で殺し、人の骨を祭壇の上で焼いた。こうして彼はエルサレムに帰った。

三そして王はすべての民に命じて、「あなたがたはこの契約の書にしるされているように、あなたがたの神、主に過越の祭を執り行いなさい」と言った。三さばきづかさイスラエルをさばいた日からこのかた、またイスラエルの王たちとユダの王たちの世にも、このような過越の祭を執り行ったことはなかったが、三ヨシヤ王の第十八年に、エルサレムでこの過越の祭を主に執り行ったのである。

四ヨシヤはまた祭司ヒルキヤが主の宮で見つけた書物にしるされている律法の言葉を確実に行うために、口寄せと占い師と、テラピムと偶像およびユダの地とエルサレムに見られるもろもろの憎むべき者を取り除いた。五ヨシヤのように心をつくし、精神をつくし、力をつくしてモーセのすべての律法にしたがい、主に寄り頼んだ王はヨシヤの先にはなく、またその後にも彼のような者は起らなかった。

六けれども主はなおユダにむかって発せられた激しい大いなる怒りをやめられなかった。これはマナセがもろもろの腹だたいしい行いをもって主を怒らせたためである。七それゆえ主は言われた、「わたしはイスラエルを移

したように、ユダをもわたしの目の前から移し、わたし  
が選んだこのエルサレムの町と、わたしの名をそこに置  
こうと言ったこの宮とを捨ててであらう」。

二八 ヨシヤのその他の事績と、彼が行ったすべての事は、  
ユダの王の歴代志の書にしるされてゐるではないか。

二九 ヨシヤの世にエジプトの王パロ・ネコが、アッスリヤ  
の王のところへ行こうと、ユフラテ川をさして上つてき  
たので、ヨシヤ王は彼を迎え撃とうと出ていったが、パ  
ロ・ネコは彼を見るや、メギドにおいて彼を殺した。  
三〇 その家来たちは彼の死体を車に載せ、メギドからエル  
サレムに運んで彼の墓に葬った。国の民はヨシヤの子エ  
ホアハズを立て、彼に油を注ぎ、王として父に代らせた。

三一 エホアハズは王となつた時二十三歳で、エルサレム  
で三か月の間、世を治めた。母はリブナのエレミヤの娘  
で、名をハムタルといつた。三二 エホアハズは先祖たちが  
すべて行つたように主の目の前に悪を行つたが、三三 パ  
ロ・ネコは彼をハマテの地のリブラにつないで置いて、  
エルサレムで世を治めることができないようにした。ま  
た銀百タラントと金一タラントのみつぎを国に課した。  
三四 としてパロ・ネコはヨシヤの子エリアキムを父ヨシヤ  
に代つて王とならせ、名をエホヤキムと改め、エホアハ  
ズをエジプトへ引いて行つた。エホアハズはエジプトへ  
行つてそこで死んだ。三五 エホヤキムは金銀をパロに送つ  
た。しかし彼はパロの命に従つて金を送るために国に税

を課し、国の民のおのからその課税にしたがつて金銀  
をきびしく取り立てて、それをパロ・ネコに送つた。

三六 エホヤキムは二十五歳で王となり、エルサレムで十  
一年の間、世を治めた。母はルマのベダヤの娘で、名を  
ゼビダといつた。三七 エホヤキムは先祖たちがすべて行つ  
たように主の目の前に悪を行つた。

第二四章 エホヤキムの世にバビロンの王ネブ

カデネザルが上つてきたので、エホヤキムは彼に隷属し  
て三年を経たが、ついに翻つて彼にそむいた。二主はカ  
ルデヤびとの略奪隊、スリヤびとの略奪隊、モアブびと  
の略奪隊、アンモンびとの略奪隊をつかわしてエホヤキ  
ムを攻められた。すなわちユダを攻め、これを滅ぼすた  
めに彼らをつかわされた。主がそのしもべである預言者  
たちによつて語られた言葉のとおりである。三これは全  
く主の命によつてユダに臨んだもので、ユダを主の目の  
前から払い除くためであつた。すなわちマナセがすべて  
おこなつたその罪のため、四また彼が罪なき人の血を流  
し、罪なき人の血をエルサレムに満したためであつて、  
主はその罪をゆるそうとはされなかつた。五エホヤキム  
のその他の事績と、彼がおこなつたすべての事は、ユダ  
の王の歴代志の書にしるされてゐるではないか。六エホ  
ヤキムは先祖たちとともに眠り、その子エホヤキンが  
代つて王となつた。七エジプトの王は再びその国から出  
てこなかつた。バビロンの王がエジプトの川からユフラ



テ川まで、すべてエジプトの王に属するものを取ったからである。

八エホヤキンは王となった時十八歳で、エルサレムで三か月の間、世を治めた。母はエルサレムのエルナタンの娘で、名をネホシタといつた。九エホヤキンはすべてその父がおこなったように主の目の前に悪を行った。

一〇そのころ、バビロンの王ネブカデネザルの家来たちはエルサレムに攻め上つて、町を囲んだ。二その家来たちが町を囲んでいたとき、バビロンの王ネブカデネザルもまた町に攻めてきた。三ユダの王エホヤキンはその母、その家来、そのつかさたち、および侍従たちと共に出て、バビロンの王に降服したので、バビロンの王は彼を捕虜とした。これはネブカデネザルの治世の第八年であつた。四彼はまた主の宮のもろもろの宝物および王の家の宝物をことごとく持ち出し、イスラエルの王ソロモンが造つて主の神殿に置いたもろもろの金の器を切りこわした。主が言われたとおりである。五彼はまたエルサレムのすべての市民、およびすべてのつかさとすべての勇士、ならびにすべての木工と鍛冶一万人を捕えて行つた。残つた者は国の民の貧しい者のみであつた。六さらに彼はエホヤキンをバビロンに捕えて行き、また王の母、王の妻たち、および侍従と国のうちのおもな人々をも、エルサレムからバビロンへ捕えて行つた。七またバビロンの王はすべて勇敢な者七千人、木工と鍛冶一千人なら

びに強くて良く戦う者をみな捕えてバビロンへ連れて行つた。八そしてバビロンの王はエホヤキンの父の兄弟マツタニヤを王としてエホヤキンに代え、名をゼデキヤと改めた。

一八ゼデキヤは二十一歳で王となり、エルサレムで十一年の間、世を治めた。母はリブナのエレミヤの娘で、名をハムタルといつた。一九ゼデキヤはすべてエホヤキムがおこなつたように主の目の前に悪を行った。二〇エルサレムとユダにこのような事の起つたのは主の怒りによるので、主はついに彼らをみ前から払いすてられた。

さてゼデキヤはバビロンの王にそむいた。

第二十五章 一そこでゼデキヤの治世の第九年の十月十日に、バビロンの王ネブカデネザルはもろもろの軍勢を率い、エルサレムにきて、これにむかつて陣を張り、周囲にとりでを築いてこれを攻めた。二こうして町は囲まれて、ゼデキヤ王の第十一年にまで及んだが、三その四月九日になつて、町のうちにきさんが激しくなり、その地の民に食物がなくなつた。四町の一角がついに破れたので、王はすべての兵士とともに、王の園のかたわらにある二つの城壁のあいだの門の道から夜のうちに逃げ出して、カルデヤびとが町を囲んでいる間に、アラバの方へ落ち延びた。五しかしカルデヤびとの軍勢は王を追ひ、エリコの平地で彼に追いついた。彼の軍勢はみな彼を離れて散り去つたので、六カルデヤびとは王を捕え、彼

をリブラに在るバビロンの王のもとへ引いていつて彼の罪を定め、ゼデキヤの子たちをゼデキヤの目の前で殺し、ゼデキヤの目をえぐり、足かせをかけてバビロンへ連れて行つた。

ハビロンの王ネブカデネザルの第十九年の五月七日に、バビロンの王の臣、侍衛の長ネブザダンがエルサレムにきて、主の宮と王の家とエルサレムのすべての家を焼いた。すなわち火をもつてすべての大きな家を焼いた。また侍衛の長と共にいたカルデヤびとのすべての軍勢はエルサレムの周囲の城壁を破壊した。こそして侍衛の長ネブザダンは、町に残された民およびバビロン王に降服した者と残りの群衆を捕え移した。まただし侍衛の長はその地の貧しい者を残して、ぶどうを作る者とし、農夫とした。

三 カルデヤびとはまた主の宮の青銅の柱と、主の宮の洗盤の台と、青銅の海を砕いて、その青銅をバビロンに運び、またつぼと、十能と、心切りばさみと、香を盛る皿およびすべて神殿の務に用いる青銅の器、また心取り皿と鉢を取り去った。侍衛の長はまた金で作った物と銀で作った物を取り去った。二六 ソロモンが主の宮のために造った二つの柱と、一つの海と洗盤の台など、これらのものもろの器の青銅の重さは量ることができなかった。二七 一つの柱の高さは十八キュビトで、その上に青銅の柱頭があり、柱頭の高さは三キュビトで、柱頭の周囲

に網細工とどろろがあつて、みな青銅であつた。他の柱もその網細工もこれと同じであつた。

一八 侍衛の長は祭司長セラヤと次席の祭司ゼパニヤと三人の門を守る者を捕え、一九 また兵士をつかさどるひとりの役人と、王の前にはべる者のうち、町で見つかった者五人と、その地の民を募つた軍勢の長の書記官と、町で見つかったその地の民六十人を町から捕え去った。二〇 侍衛の長ネブザダンは彼らを捕えて、リブラに在るバビロンの王のもとへ連れて行つたので、二一 バビロンの王はハマテの地のリブラで彼らを撃ち殺した。このようにしてユダはその地から捕え移された。

二三 さてバビロンの王ネブカデネザルはユダの地に殘してとどまらせた民の上に、シャパンの子アヒカムの子であるゲダリヤを立てて総督とした。二四 時に軍勢の長たちおよびその部下の人々は、バビロンの王がゲダリヤを総督としたことを聞いて、ミヅバに在るゲダリヤのもとにきた。すなわちネタニヤの子イシマエル、カレヤの子ヨハナン、ネトバびとタンホメテの子セラヤ、マアカびとの子ヤザニヤおよびその部下の人々がゲダリヤのもとにきた。二五 ゲダリヤは彼らとその部下の人々に誓つて言つた、「あなたがたはカルデヤびとのしもべとなることを恐れてはならない。この地に住んで、バビロンの王に仕えなさい。そうすればあなたがたは幸福を得るでしょう。」二六 ところが七月になつて、王の血統のエリシャマの子で

あるネタニヤの子イシマエルは十人の者と共にきて、ゲダリヤを撃ち殺し、また彼と共にミヅバにいたユダヤ人と、カルデヤびとを殺した。三六そのため、大小の民および軍勢の長たちは、みな立つてエジプトへ行った。彼らはカルデヤびとを恐れたからである。三七主の宮の大車エムダの王エホヤキンが捕え移されて後三十七年の十二月二十七日、すなわちバビロンの王エビルメロダクの

王の命により、主の宮の青銅の像を、主の宮の

王の命により、主の宮の青銅の像を、主の宮の

王の命により、主の宮の青銅の像を、主の宮の

治世の第一年に、王はユダの王エホヤキンを獄屋から出して三ハねんごろに彼を慰め、その位を彼と共にバビロンにいた王たちの位よりも高くした。二九こうしてエホヤキンはその獄屋の衣を脱ぎ、一生の間、常に王の前で食事した。三〇彼は一生の間、たえず日々の分を王から賜わつて、その食物とした。三一王の命により、主の宮の大車エムダの王エホヤキンが捕え移されて後三十七年の十二月二十七日、すなわちバビロンの王エビルメロダクの

王の命により、主の宮の青銅の像を、主の宮の

王の命により、主の宮の青銅の像を、主の宮の

王の命により、主の宮の青銅の像を、主の宮の